オスティア・アンティーカ

—古代ローマの外港—

Ostia Antica, the Port of Ancient Rome

久志本　秀　夫

Hideo Kushimoto

1．はじめに

1976年夏の二回にわたるオスティア踏査（7月28日、8月10日）は深い印象を筆者に残したのであった。第一回目の踏査の前日、サン・セバスティアーノ門（古代のアッピア門）よりアッピア街道を2キロ余り歩いてクウォ・ウァディス教会に至り、キリストの足跡なるものを見て来たのであるが、自動車の騒音と排気ガスには閉口した。翌日、夕方の列車でローマを離れなければならないので、気のせくままに約4時間、炎天の下に歩いたオスティアは、正に壮大な遺跡であった。海から絶えず吹いて来る涼風に傘松が颯々と鳴る。それが廃墟とあいまって憂愁感を与えるのである。しかもポンペイのように観光客の群はない。筆者は7月28日、午前10時発の電車でサン・パオロ門駅よりオスティアへ向ったのであるが、オスティア・アンティーカ駅で下車したのは10人足らず、遺跡も静かであった。前日の喧噪、当日の静穏、オスティアに魅せられた次第である。

我が国においては、オスティアに触れた論考は極めて少い。筆者が関西学院大学文学部史学科で教えを受けた故粟野頼之祐教授は、晩年の研究で、年貢穀物の荷揚げ港としてのオスティアを概観しておられる。他には、同志社大学の浅香正教授が紀行風にオスティア史と遺跡とを述べておられる[(1)]のを除いて、目ぼしいものは見当たらない。浅香教授が、

「わたくしが古代オスティアの遺跡を訪ねたのは7月下旬の炎天の日であり、ほとんど掩蔽物のない遺跡を一日中歩きまわった後の疲労感は今も忘れることができない[(2)]」

と記されているのには同感である。ただオスティアを丹念に見ようと思えば、最低3日は必要であろう。筆者は2日間歩いたのみであるが、重要な遺跡は大体撮影した。そこで、知られる所の少ないオスティアを写真と文で紹介し、本邦学界におけるオスティアへの関心が増大することを願うのである。

2．略称一覧（年代順）

MEIGGS　=Meiggs, R., *Roman Ostia,* Oxford (1960)

R. CALZA =Calza, R., *Ostia,* Roma (1965).
GUIDA =*Roma e dintorni: Guida d'Italia del Touring Club Italiano,* Milano (1965).
AWANO =粟野頼之祐、「ローマ帝政初期に於けるエジプト産『アンノーナ』年貢穀物輸送について」関西学院史学、9・10合併号、(1967)、1～86
OCD, 1 =*The Oxford Classical Dictionary,* 1st Edition, Oxford (1957).
OCD, 2 =*Idem,* 2nd Edition (1970).
G. CALZA =Calza, G., Becatti, G., *Ostia, Itinerari n. 1,* 11ma edizione, Roma (1975).
DAL MASO=Dal Maso, L. B., Vighi, R., *Ostia-Porto-Isola Sacra,* Firenze (1975).
ROSSITER =Rossiter, S., *Rome and Environs,* second (corrected) impression, London (1975).

詳細な文献表については、MEIGGS,568～574, G. CALZA, 5～6にある。特にG. CALZAの文献表は1960年のMEIGGS以後を補うものであるが、イタリア文部省発行の発掘報告をあげているので列挙しておく。

Ⅰ. *Topografia generale,* Roma (1953), a cura di G. Calza, G. Becatti, I. Gismondi, G. De Angelis d'Ossat, H. Bloch.
Ⅱ. *I Mitrei,* Roma (1954), a cura di G. Becatti.
Ⅲ. *Le Necropoli repubbicane ed augustee,* Roma (1957), a cura di H. Bloch, R. Calza, I. Gismondi, M. Floriani Squarciapino.
Ⅳ. *I mosaici e i pavimenti marmorei,* a cura di G. Becatti, Roma (1961).
Ⅴ. *I ritratti,* a cura di R. Calza, parte I, Roma (1964).
Ⅵ. *Edificio con opus sectile fuori Porta Marina,* a cura di G. Becatti, Roma (1969).
Ⅶ. *I Capitelli,* a cura di F. Pensabene, Roma (1973).
Ⅷ. *Le fulloniche,* a cura di A. L. Pietrogrande, in corso di stampa.

3. オスティアの起源

ローマの外港オスティアは、首都の西南約24キロに位置する。古代にはテヴェレ川（ラテン語名ティベル川）河口の川港として活用されたが、現在では土砂の推積によって4キロ海岸より奥まった所にある。そこで、夏海水浴客でにぎわう海辺のオスティアをLido di Ostia（オスティア海岸）、遺跡のある方をOstia Antica（古代オスティア）と称している。

オスティアはラテン語イタリア語共に同綴で、入口を意味するラテン語Ostiumに由来し、テヴェレ川の「入口の地」をあらわしている。

伝説によれば、トロイアの英雄アイネイアースは、故国の陥落後、イタリアに来てローマ人の祖先になったということであるが、詩人ウェルギリウス（70～19B.C.）がその「アイネ

ーイス」(Aeneis) で歌う英雄テヴェレ川到着の場は感動的である。

「やがて海の面、曙の光にあからみ初め高き穹窿にては蕃紅色のアウローラ、彼女の薔薇色の車の中に照り輝き始む。其時、風は忽ち落ち、空気の動きは総て不意に止り、櫂はのろき水をば徐々と打つ。茲にアェネーアースは、海より大なる森を見たり。その間をば快き流れのティベリーヌスぞ、急速なる渦紋を為し、多くの砂にて黄に見えつつ、つと海に流れ入る。その河の岸にも、河床にも、通ひ馴れて、色様々の翅したる鳥ども、そのあたりも上なる空も彼等の歌声もて充たし、森をも飛びまはる。アェネーアースは、僚友等に命じて進路を転じ船首を陸の方に向けしめ、蔭ある河の中へと喜んで港入りす」[3]

アイネイアースが上陸したとされる地点は、伝承ではテヴェレ川の河口よりも南なのであるが、なぜウェルギリウスがテヴェレ川に持って来たか、そしてアイネイアースが建設した新トロイアにウェルギリウスの見たオスティアが投影されているのか、様々な議論がなされている。[4]

伝説的英雄が打入ったというテヴェレ川の河口に出来た港町オスティア、それはローマの文筆家にとっては王政時代第4代の王アンクス・マルキウス（642～617B.C.）の創設という伝えが固持された。

その最も早いあらわれは、詩人エンニウス（239～169B.C.）の叙事詩「年代録」(Annales) にある。

「オスティアは砦となった。王はまた大きな船や、海に生活する人のために水路を掃除した」[5]

前1世紀後半にローマに来たディオニュシオス・ハリカルナッソスも

「川と海との間にある臂の如き土地に、王は町をつくり、壁をもってそれを取り囲み、その場にちなんでオスティアと名づけた」[6]

と書いている。

オスティア最古の遺構は、前300年代中頃をさかのぼるものはない。しかしオスティア周辺の塩田や、テヴェレ川沿岸に王政時代の遺跡存在の可能性はある。またアンクス・マルキウス王が滅ぼしたというフィーカーナ（Ficana）やポリートーリウム（Politorium）の最近の発掘成果は、これらの集落がその頃突如として没落したことを示唆している。[7]つまりローマよりテヴェレ川河口に至る町を征服し、エトルスキ人や海賊を防ぐために王がオスティアを創設したという伝承は、Prima Ostia（最初のオスティア）とも呼ぶべき遺構の発掘によって実証されるかもしれない。

オスティアはフォルム（付図B、49）を中心とする東西128メール、南北194メートルの矩形のカストゥルム（城塞）より始まる。

ローマがまだ海軍を持っていなかった頃、イタリア西岸を守るために、コローニア（植民地）が設けられた。まずオスティア、ついで前338年アンティウム（Antium)、前329年アンクスル（Anxur）にローマ市より各300名の植民者が送られたとある。[8]

カストゥルムは植民者が極めて軍事的な目的のために居住した場である。そしてオスティ

アのカストゥルムは何年に設けられたか。カルコピーノとカルツァは、前335年のローマ最初の貨幣に、船の舳先の浮き彫りがあるのに注目し、それがオスティア創設に関連があると見て、前338年～317年の間に年代を設定している。[9]

一方マイグスは、カストゥルムの防壁に使用されている凝灰岩は、前300年代初頭にローマに征服されたフィーデーナエ（Fidenae）産であること、またフォルムより出土した陶器の断片はカエレ（Caere）で製作されたものであり、前400年～340年の間に作られたと考えられることから、オスティア創設の年を前349年頃に置いている。[10]

前3世紀のオスティアには軍港としての性格が強く窺がわれる。前267年4人の「艦隊財務官」quaestores classiciが任命され、そのうちの一人がオスティアに常駐し、「オスティア財務官」quaestor ostiensisと呼ばれた。この財務官の職務については、史料が乏しいので問題であるが、マイグスは、

「新財務官の職務は多分に、ローマ艦隊のために従属都市や同盟都市より金や船を集めることにあったのであろう。共和政後期にこの財務官のことは、艦隊の準備に関連しては現われない。彼らの仕事は、より総括的になったと思われる」[11]

と述べている。

第2ポエニ戦争（218～201B.C.）に際しては、軍港オスティアの記事がリウィウスの「ローマ史」に見られるが、前211年スキーピオ（236～184/3B.C.）がオスティアよりスペインに出発したことが目立っている。[12]

ポエニ戦争後、オスティアは軍港より商港の性格を帯びてくる。前3～2世紀にカストゥルムの防壁の外に建造物が増加するのはそのことと無関係ではない。

また前2世紀にローマ市の人口は急増した。当然、穀物の確保が問題となるが、ローマ周辺の生産力は落ち、農地は荒廃しつつあった。[13]ローマは属州のシチリアとサルデーニャに年間10分の1税を課したが、それでも十分ではなかった。

前196年シチリアより100万モディウスの小麦が送られた。[14]前191年にカルタゴとヌミディア王マシニッサとは小麦50万モディウスと大麦25万モディウスをローマに送った。[15]前146年カルタゴが滅亡し、アフリカが属州となってから穀物供給地が増加することとなった。

南伊プテオリ港は、設備の良好とギリシア商人との伝統的交渉とあいまって、ローマの東方貿易の基地であった。[16]エジプトよりパピルス、ガラス、麻、シチリアより彫刻、宝石などが輸入され、アッピア街道を経由してローマに運ばれた。しかし西方のスペイン、サルデーニャ、ガリアとの交易をプテオリが独占した形跡はない。これらの地から来た船はオスティアに入港したらしい。更に、シチリア、サルデーニャ、アフリカから来る穀物はオスティアに到着し、ついでローマに運ばれたと推定される。[17]オスティア財務官の仕事も、前2世紀末には穀物輸入のそれに変っていた。

前1世紀初めにおけるマリウス派とスルラ派の内乱は、オスティアの重要性を浮き彫りにする。即ち、前87年マリウスはアフリカより戻ると、ローマ進軍を前にしてオスティアを占領し、略奪した。[18]3年後、東方より帰還したスルラは、先遣隊々長にオスティア占領を指示

した。[19]

さて、カストゥルムの壁の外側に市域を8倍に広げて囲んでいる新しい防壁がある。帝政初期にローマ門（写真③）復原に際してかかげられたと考えられる碑文があるが、次の如く読まれると推論されている。[20]

se(natu)s (p)opulu(sque R.) c(olon)ia(e O)s(tie)nsium m(u)ro(s) dedi(t).

「ローマの元老院と人民は植民地オスティアに市壁を献じた」

帝政時代であるのにもかかわらず、皇帝の名が見えぬのは、上記碑文が共和政時代のものの復原であった為かもしれない。新市壁の奉献者は史料の上では分らないが、一般にスルラであるとされる。上の碑文はその傍証となるだろう。

カストゥルムの東門（写真⑭）よりローマ門に至る地はカニニウス（Caninius）なる行政官により「公共地域」(ager publicus) と定められた。その為か前1世紀には神殿や円形劇場（写真⑧）などがこの区域にできるのである。[21]

「共和政末期のオスティアは、商業的性格をもつ活発なセンターとなっていた。店が軒を並べ、アトリウムと列柱廊つき中庭のある広大な金持ちの家のかたわらに、まことにつつましい民衆の住宅があった。様々な神殿や規則的な幹線道路があり、縞状石灰岩や凝灰岩の柱をもつ柱廊が道路に面した。道路の下には下水管があった」。[22]

ここにいう幹線道路とは幅約10メートルの東西大通り Decumanus Maximus と南北大通り Cardo Maximus をいう。これらはラテン都市の特徴で、両者は町の中心で交叉していた。オスティアの場合はカストゥルム時代の幹線が基礎になっている。ただし、初期の東西線の幅が一段と狭くなっているのは、カストゥルムの東門の写真（⑭）に見られる。

4. 帝政時代における繁栄

初代皇帝アウグストゥス（27B.C.～A.D.14）は、ローマ市を煉瓦より大理石に変えた人として知られるが、オスティアも徐々に景観を変えていく。まず、彼の名臣アグリッパ(64/63 B.C.～A.D.12）が円形劇場とそれに接続する柱廊をつくった。後者は商人組合広場（写真⑨）となって、オスティアの隆盛を我々に示している。ティベリウス帝の時にはフォルムがつくられ、ローマとアウグストゥスの神殿（写真⑯）が築かれた。カリグラ帝（37～41）はオスティアの東方8キロより水道を引いた。以後、井戸に頼っていた飲料水の問題は解結し、豊かとなった水を利用する公共浴場が建設される。

ここで当時のオスティア港の状況を示す同時代史料を二つ紹介する。最初のものは、没年は定かではないが、アウグストゥス帝の頃にローマにいたディオニュシオス・ハリカルナッソスの「ローマ古史」より。

「(テヴェレ) 川は海に接近するにつれて、大きく湾曲し、すぐれた河口港としての広々とした湾を形成する。そして驚くべきことには、多くの大河のように海の砂という障壁に

より河口より切断されていない。それは絶えず変化する沼沢となり、海に至るまで消えることはない。この川は常に航行可能で、自然かつ唯一の河口を経て、海に流入する。風が頻繁に西から吹いてくるので危険ではあるが、海の波を（川の流れの力で）押し返す。それ故3000[23]までの櫂つきの船や商船が河口に入り、小舟または徒歩でローマに至る。また大きな船は河口の沖に碇泊し、川舟に荷が積みかえられる」[24]

次は地理学者ストラボン（64/63B.C.～A.D.21頃）の記述。粟野先生の訳によった。

「オスティアは、港（碇泊所）のない港であるが、それは小さい幾つもの河川によって、川の流水を増しているため、ティベル川がその原因となって沖積物があるからである。現在、商船にとっては危険ではあるが、大波の中で沖遠く碇泊する。その上、充分な利潤の見込があることと、実際には多くの伝馬船を供給して荷物を受取り、その交換として、他の（内地産の）荷物を持帰って、しかもその船舶が川に達する前に外航出来るようにしてあり、なお、またそれらの船荷の一部を軽くしてもらって、(船脚を浅くし）ティベル川を航行してローマまで内陸地を航く」[25]

以上の史料より川港としてのオスティアの限界性が窺がえるのである。そこで首都ローマの近傍に良港をつくろうという計画は、カエサルの時に既にあったというが、それを実現したのはクラウディウス帝（41～54）であった。

帝が新港建設に踏み切ったのは、飢餓への恐れであったと思われる。セネカ（B.C.4/A.D.1～65）によると、クラウディウスが即位した頃、ローマには8日間の穀物貯蔵量しかなかったという[26]。食糧不足は帝都騒擾を誘発する。そこで遠路120マイル彼方のプテオリより運ばれる穀物を一気にローマの近くに集中せしめようとしたのであろう。

歴史家スエトニウス（60～140頃）は次のように述べている。

「かれは、オスティアに港湾を建造した。つまり右側防波提と、左側より（防波提を）出して円形に波止場を構築し、水の深いところを港の入口とした。かれは、この突提の基礎工事をするため、エジプトから巨大なオベリスクを運搬させて（ここに）船舶を沈めた。そしてアレクサンドリアのファロス[27]を模し、石畳を積み重ね、その上に、夜間明りを焚いて、航海者たちに方角を指示した」[28]

スエトニウスの記述は非常に正確であって、二つの湾曲する防波提が海中に建設され、燈台を支えるために大商船が沈められた。この船はカリグラ帝が今ヴァティカンのサン・ピエトロ広場に立っているオベリスクをエジプトより運ばせたものである。最近の発掘成果によると、船の長さ104メートル、幅20.3メートル、排水量7400トン、乗組員700～800人であったとのことである[29]。

新港の位置は、オスティアの西北約4キロ、現在のエピスコピオ・ディ・ポルトとモンテ・アレーネとの間である。すぐ北にローマ国際空港があり、その工事の際に発掘が進捗した。

クラウディウス港は42年に着工され、54年、ネロ帝（54～68）の登極後完成された[30]。

64年、新港完成を記念する貨幣が発行されたが、portus Augusti Ostiensisの銘がある[31]。意味は「オスティアのアウグストゥス港」であるが、このアウグストゥスは固有名詞という

より、皇帝という普通名詞であろう。されば「オスティアの皇帝港」と解釈する方がよいだろう。一般には「クラウディウス港」とよばれている。クラウディウス港の周辺に住宅の遺構はあまり発見されていないので、港に働く人たちはオスティアより通ったらしい。[32]

新港の面積は90万平方メートル、最大長径は約1100メートルであった。一時に300隻の碇泊を可能としたという。[33]

しかるに62年暴風雨のためにクラウディウス港で200隻の船が沈んだ。[34]そのため、より安全な港が必要となり、100年より106年にかけてクラウディウス港の奥に六角形の新港がつくられ、建設者トライアーヌス帝にちなんで「トライアーヌス港」(portus Traiani) と名づけられた。[35]六角形の一辺357.77メートル、最大長径715.54メートル、面積321,993平方メートル、[36]深さ4メートル[37]と測定されている。

トライアーヌス港の周辺には、神殿、倉庫、住宅、柱廊[38]などが建設された。またテヴェレ川との連絡は、クラウディウス港開鑿の際につくられた運河を基礎に、「トライアーヌスの運河」が整備された。(これは今日でも残っておりFiumicino〔小さい川〕と呼ばれている。またフィウミチーノは地名ともなり、国際空港もその名を持つ。一方、二つの新港の地はポルト〔Porto、港〕の地名がある。本稿ではそれに関連する時はラテン名ポルトウスを使用する)

東北のローマ、東南のオスティアとは川舟で連絡された。また陸路では、運河によって島となったイゾラ・サクラ (Isola Sacra、聖なる島の意。墓地がある) を経由する道がオスティアへ通じていた。

これらの新港の完成によって、オスティアの繁栄はそちらに移ったという主張がなされたこともあるが、遺跡発掘が進むにつれて、かかる説は否定されたのである。

第2世紀、特にハドリアーヌス帝 (117〜138) とアントニーヌス・ピウス帝 (139〜161) の時代には、建造物の増加が見られる。穀物貯蔵のための大倉庫が出現し、集中住宅、即ち現今のアパートが現われた。浅香教授はアパートについて次のようにまとめておられる。

「焼成煉瓦によって丹念に化粧され、一階は商店で、二、三階あるいは四階までがアパートメントとなっており、ローマ型都市発展の最高の時期を示している。……このような数階層におよぶ住宅建築は、市壁内における空地が次第に減少し、ティベリス川岸にある荷物集積地あるいはクラウディウスおよびトラヤヌスの両港で働く労働者のための住宅として発達したものである。今日のローマでは見ることのできない下層市民の住宅建築を知るための重要な資料を提供している」[39]

ハドリアーヌスはまたフォルムのカピトリウム (写真⑮) を建造し、ローマとアウグストゥスの神殿に対置させる。公共浴場の数も増加し、少くとも17を数えた。[40]共和政後期に普及した一戸建住宅は、2世紀には建てられなかったが、オスティア南方の海岸に別荘が増え、その中に小プリニウス (61〜112頃) の別荘もあったのである。[41]小プリニウスはローマ社会を活写する書簡文を残してくれた人であるが、その別荘の位置は定かではない。しかしオスティアの東南約6キロの地にVilla di Plinioという小集落が現存している。

5．その後のオスティア

オスティアの衰退は紀元3世紀の混乱期に始まり、コーンスタンティーヌス帝(306～337)に至って拍車がかけられる。それはオスティアよりポルトゥス偏重となって現われた。ポルトゥスはCivitas Constantiniana（コーンスタンティーヌス市）となり、都市の特権もポルトゥスへ移された。それまでportus Ostiae（オスティアの港）あるいはportus Augusti（皇帝港）とよばれていたポルトゥスモ、今やportus Romae（ローマ港）となった[42]。またポルトゥスにも司教が置かれた[43]。

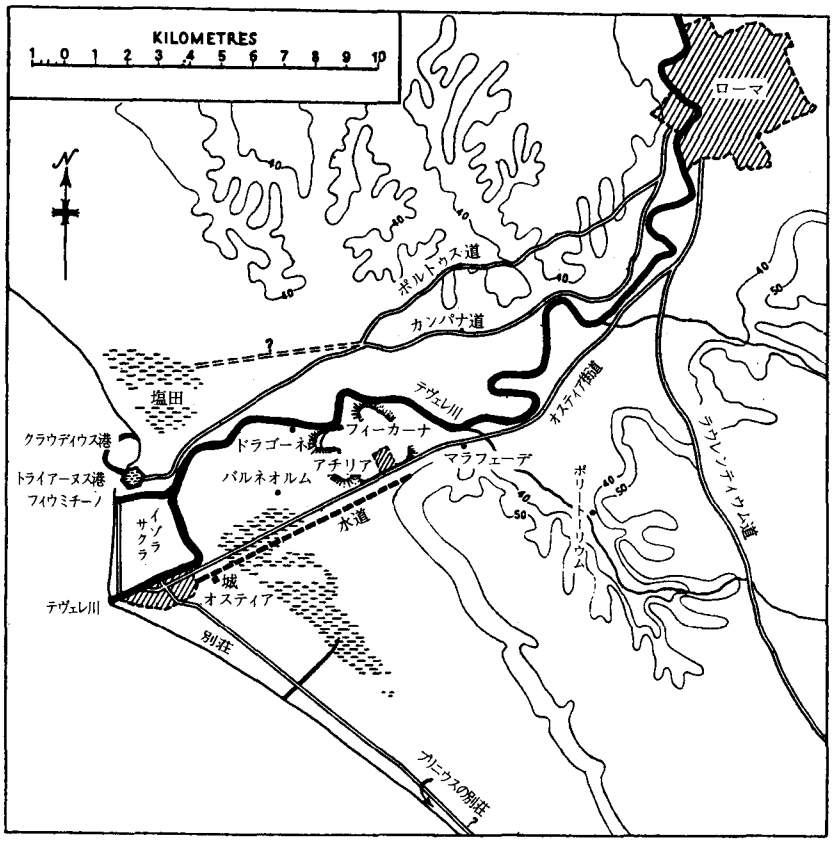
しかし最近の発掘によって、4世紀のオスティアには集中住宅は建てられていないが、一戸建住宅がつくられていたことが分ってきた。これはオスティアが商業都市より、海辺のリゾートタウンに変ってきたことを意味する。富豪にとって、オスティアは魅力的な保養地であったのであろう。大理石がぜいたくに使用され、噴水などの設備もあった（写真㉖)。

387年聖アウグスティヌスがアフリカに帰らんとして、母モニカと共にオスティアで船を待っている時に、母が没した話は有名である。後述するオスティア城の一郭に聖アウレア教会があり、その礼拝堂に聖モニカの墓石の断片と思われるものがある[44]。

その後、数世紀の間、オスティアは荒廃の一途をたどる。830年教皇グレゴリウス4世(827～844)は自己の名を冠するグレゴリオポリスを創設した。これが古代オスティアの東にある今のオスティア集落の起源であり、そのはずれにある城は、教皇ユリウス2世(1503～1513)が枢機卿時代に築かせたものである。1557年の氾濫でテヴェレ川の流れが大きく変ったが、当時のオスティア城は川の傍らにあって、海からの敵に対してローマを護った。1756年、かって8万人の人口を誇ったオスティアも、わずか156人がオスティア村に居住するのみであった[45]。

さてオスティアの発掘は19世紀初頭、教皇ピウス7世(1800～1823)が手をつけ、カルロ・フェアに発掘させた。ヴアティカン博物館のSala a Croce Greca（ギリシア十字の間）を飾る皇帝の肖像はこの時の発掘成果らしい[46]。ついでピウス9世（1846～1878）は1855年ヴィスコンティに発掘を命じたが、主として教皇庁のコレクションを増すにとどまった。1907年考古学者ダンテ・ヴァリエーリの総指揮下に組織的な発掘が開始された。その後1942年のローマ万国博の野外展示に間に合わせるために、大規模な発掘が行なわれ、オスティアの4分の1が明らかとなった[47]。現在は町の2分の1の発掘が完了している[48]。

(1977. 11. 30)



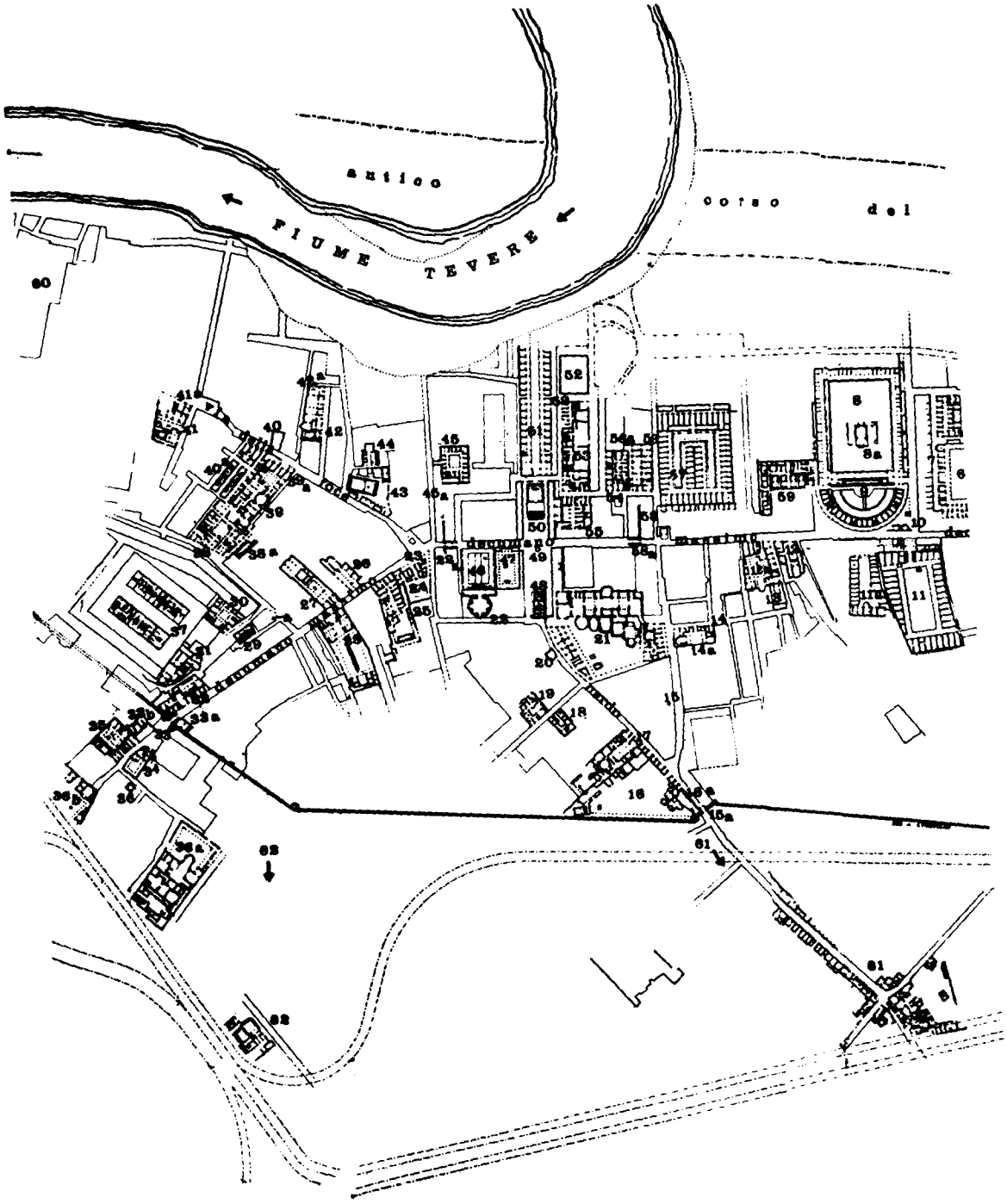
付図A　ローマよりオスティアへ　　MEIGGSより

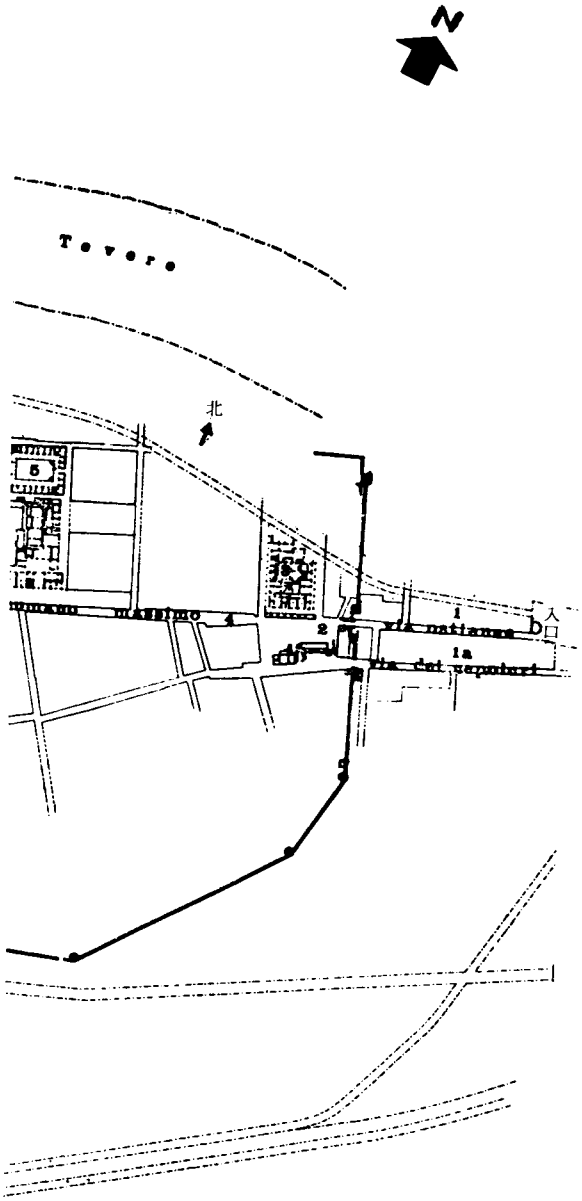
ローマよりオスティアへの行程は写真②の解説にて略述しているので参照されたい。アンクス・マルキウス王が攻落したというフィーカーナは現在のドラゴンチェルロ(Dragoncello)、ポリートーリウムはポンティーナ（Pontina）川のほとりのカステル・ディ・デチマ（Castel di Decima）の付近にあった。

マラフェーデ（Malafede）は現在の小集落で、小プリニウスが自己の別荘へ行く時、ここから南下したと思われる地点。オスティア街道の哩程標は唯一基、ローマのラテラン博物館に保存されているが（*CIL* I^2, 22)、それは第11マイルの標石で、マラフェーデがその地に当たる。

ローマ古道の石畳道は、アチリア（Acilia）付近でも残っている。オスティア街道については次の参考文献がある。Squarciapino, M. F., *Il Museo della Via Ostiensis,* Roma (1955)。

オスティア・アンティーカ





付図B　オスティア　　R. CALZAより

〔主要遺蹟〕

門

2．ローマ門
15a．ラウレンティウム門
33．海洋門
58a．カストゥルムの東門
22a．カストゥルムの西門

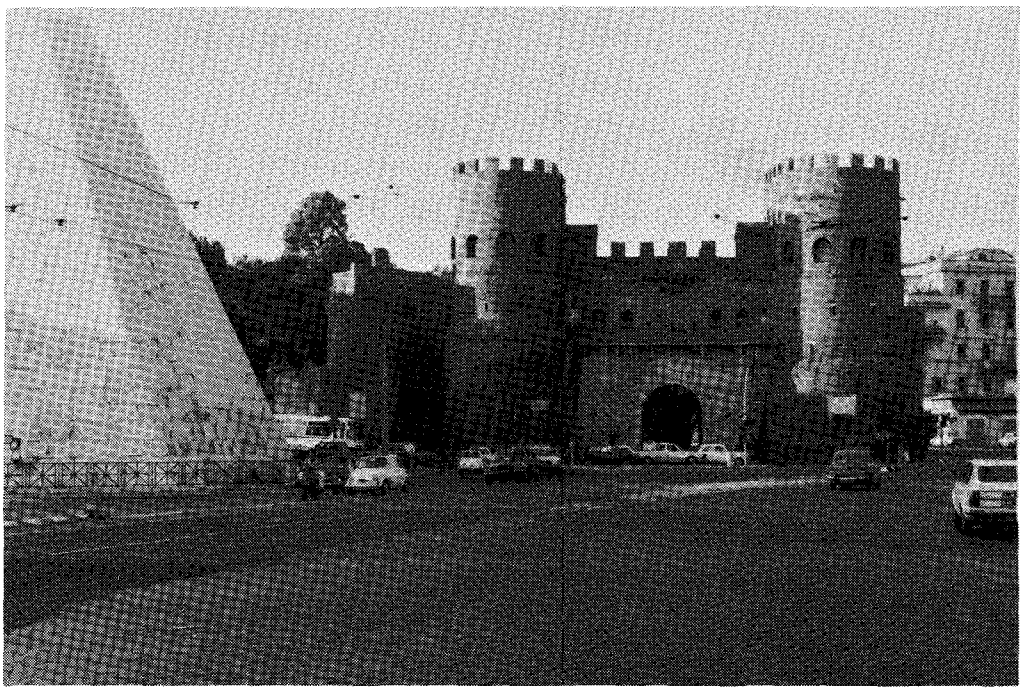
宗教関係

10．キリスト教礼拝堂
16．大地母神の神域
19．「魚の家」
26．キリスト教聖堂
41．セラピス神殿
43．共和政期の3神殿
（この中に写真㉒の神殿あり）
48．ローマとアウグストゥスの神殿
50．カピトリウム
59．共和政期の4小神殿
（この北に写真⑫のミトラエウムあり）
62．ユダヤ教教会

その他

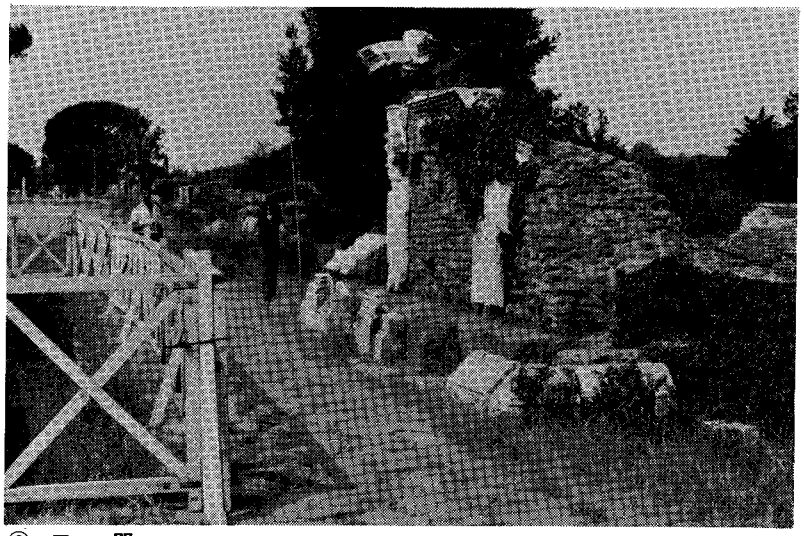
5．消防隊士の宿舎
8．商人組合の広場
11．ホルテンシウスの倉庫
14a．「幸運のアンノーナ」の家
23．分岐点と魚屋
40．穀物計量業者のホール
42．ミトラの公共浴場
44．アモルとプシューケーの家
49．フォルム
57．大倉庫

antico corso del Tevereとあるのは1557年の洪水以前の河のコース。



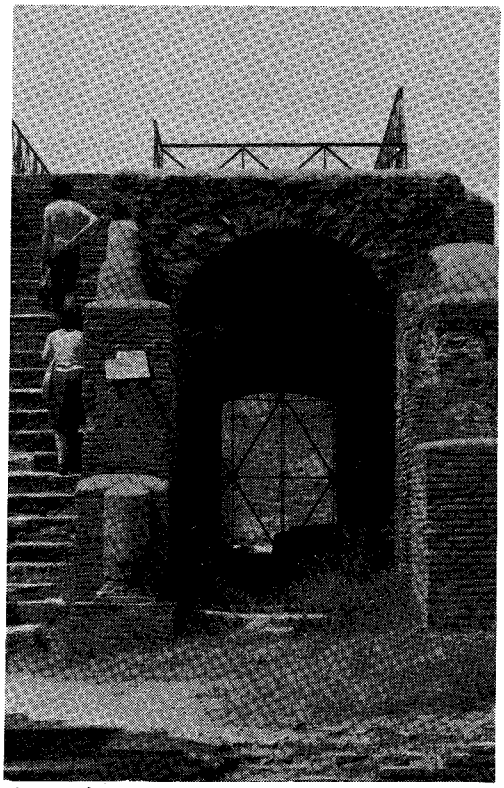
① オスティア門(現、サン・パオロ門)

② オスティア街道

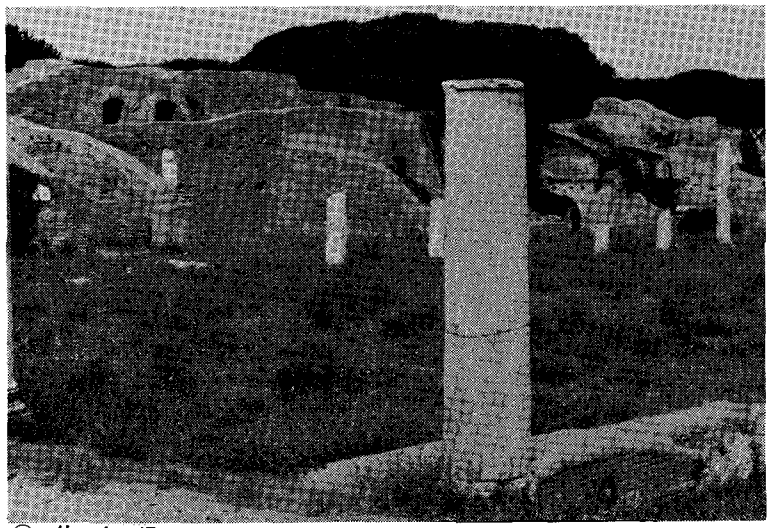


③ ローマ門

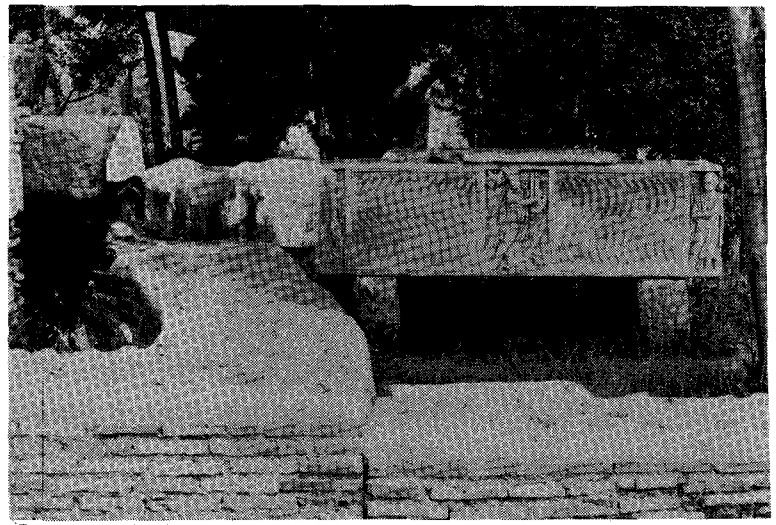
④ 勝利のミネルヴァ像



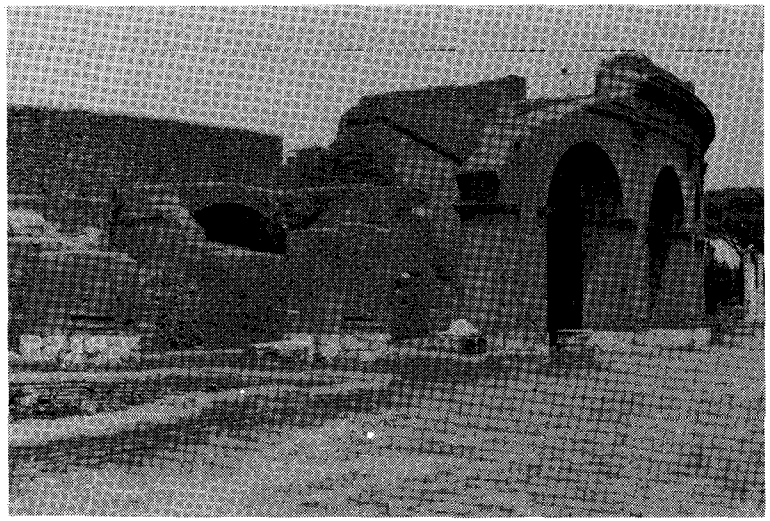
⑤ ネプトゥーヌスの公共浴場



⑥ 体 育 場

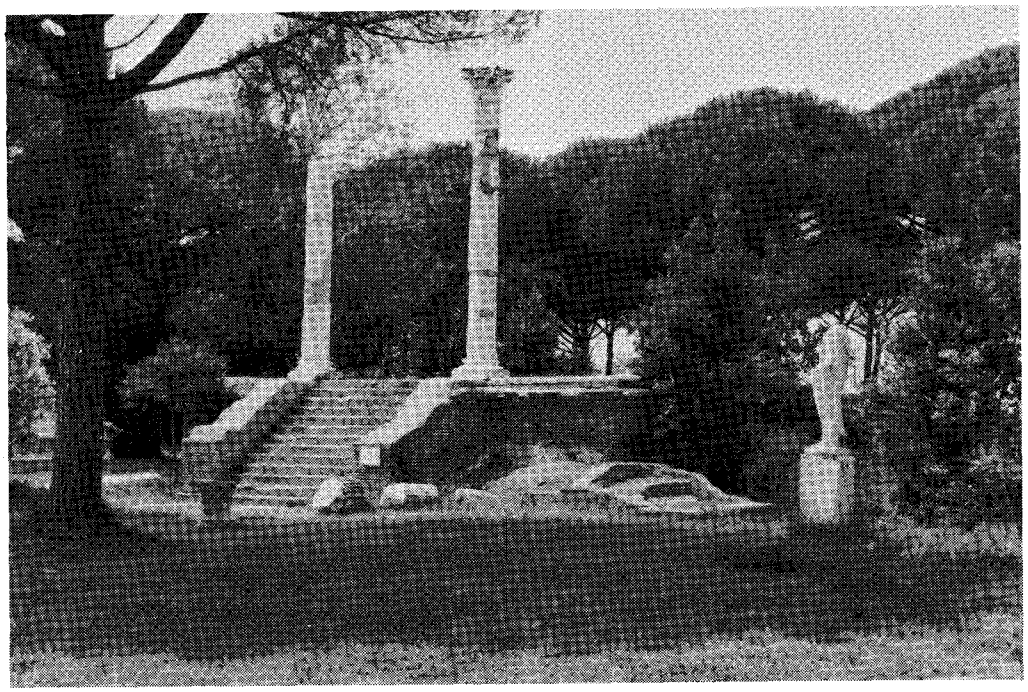


⑦ キリスト教礼拝堂

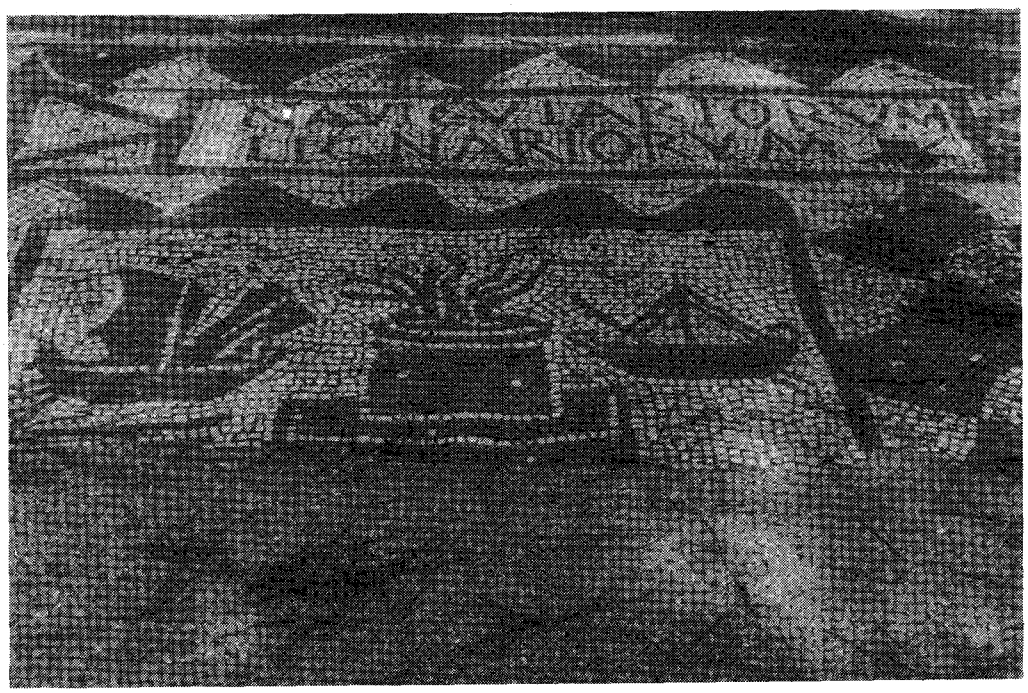


⑧ 円形劇場

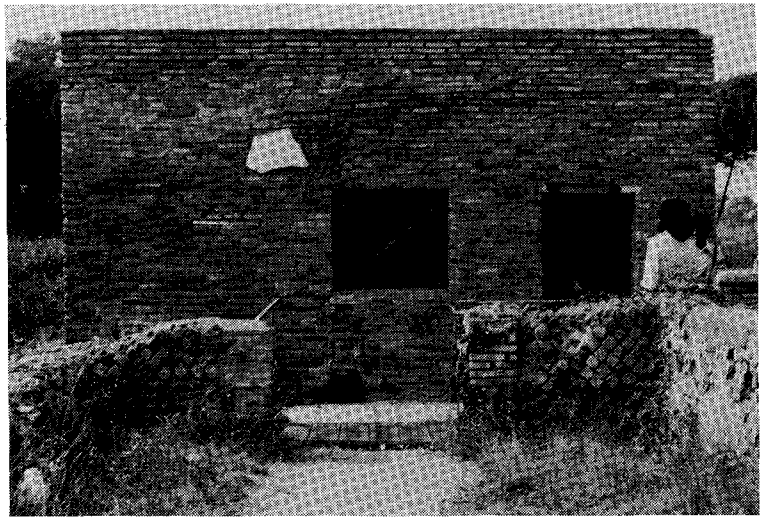
⑨ 商人組合の広場



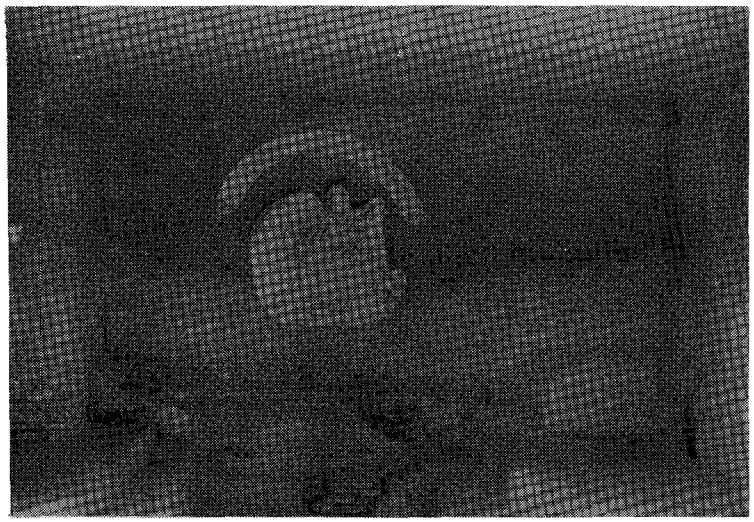
⑩ 商人組合広場の神殿



⑪ 商人組合広場のモザイク

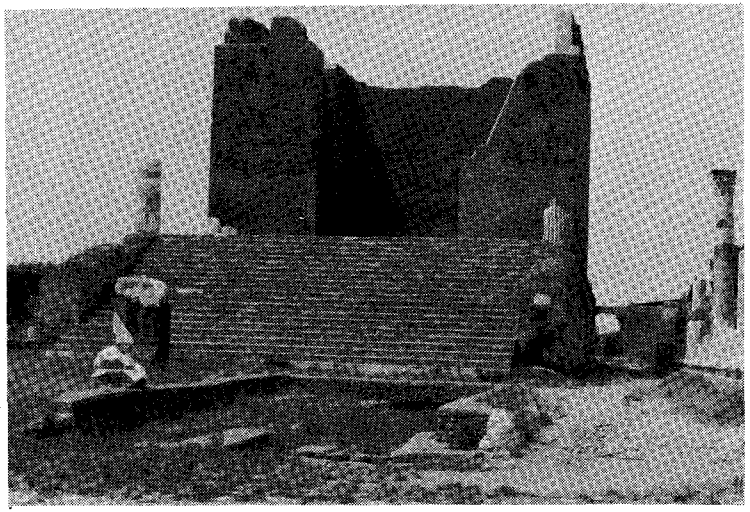


⑫ ミトラ教礼拝堂



⑬ ミトラ神像

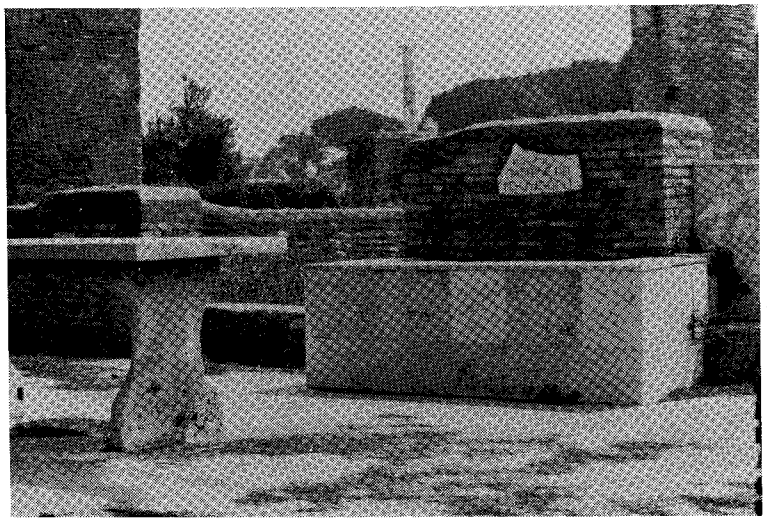
⑭ カストゥルムの東門



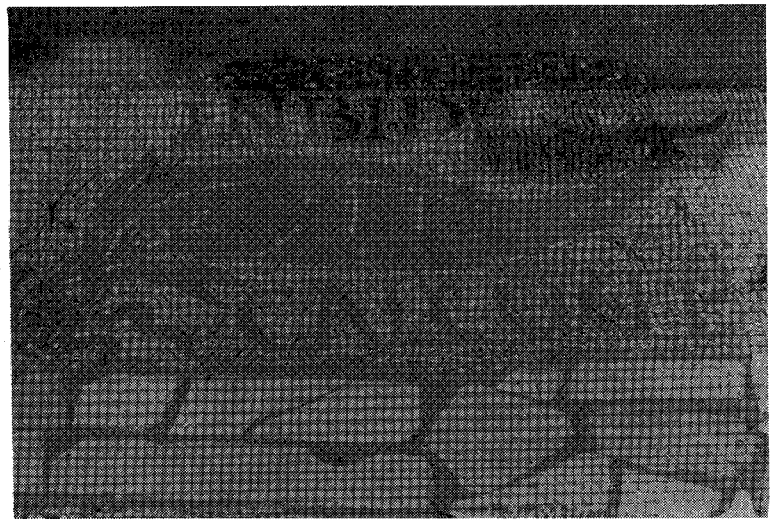
⑮ カピトリウム

⑯ ローマとアウグストゥスの神殿

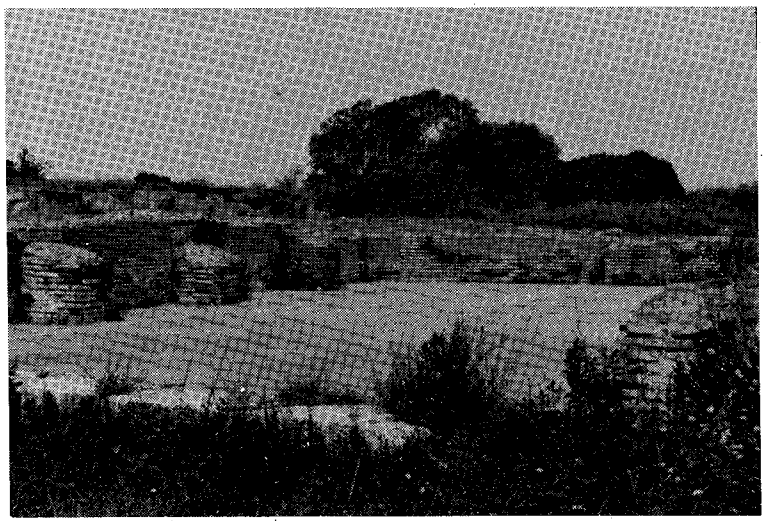
⑰ 「勝利者、ローマ」女神像



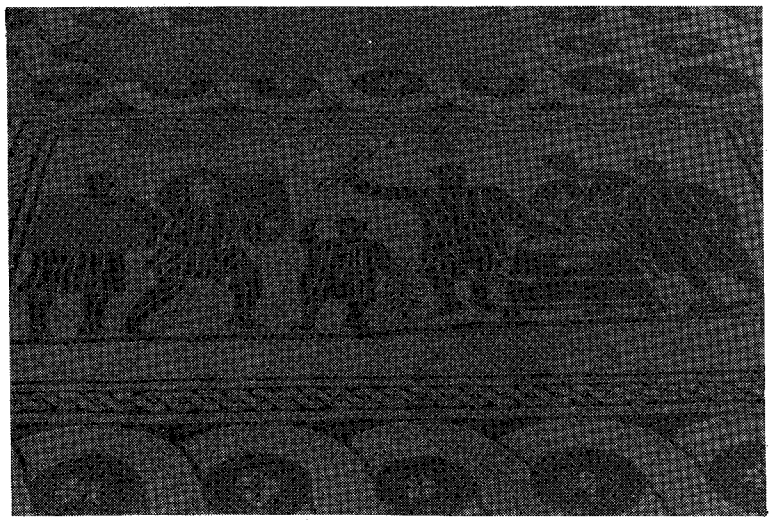
⑱ 魚　屋



⑲ 魚屋のモザイク

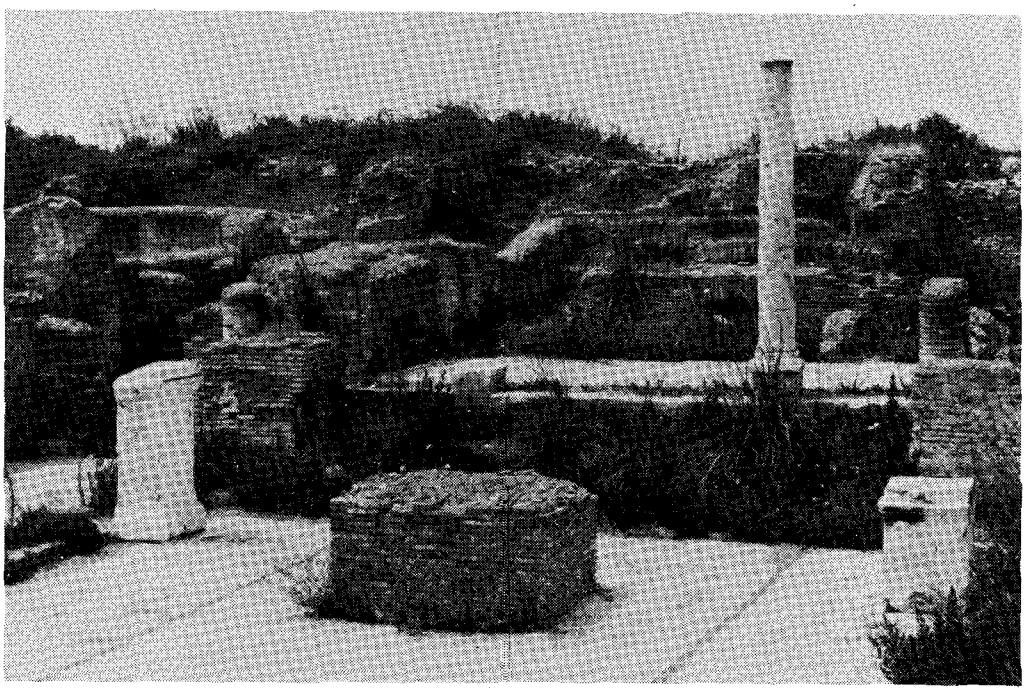


⑳ 穀物計量業者のホール

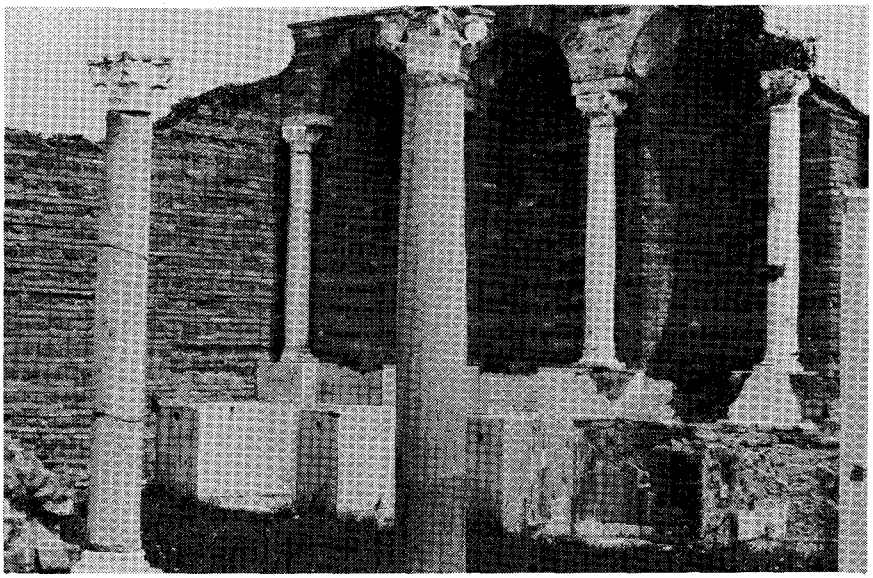


㉑ 穀物計量業者のモザイク

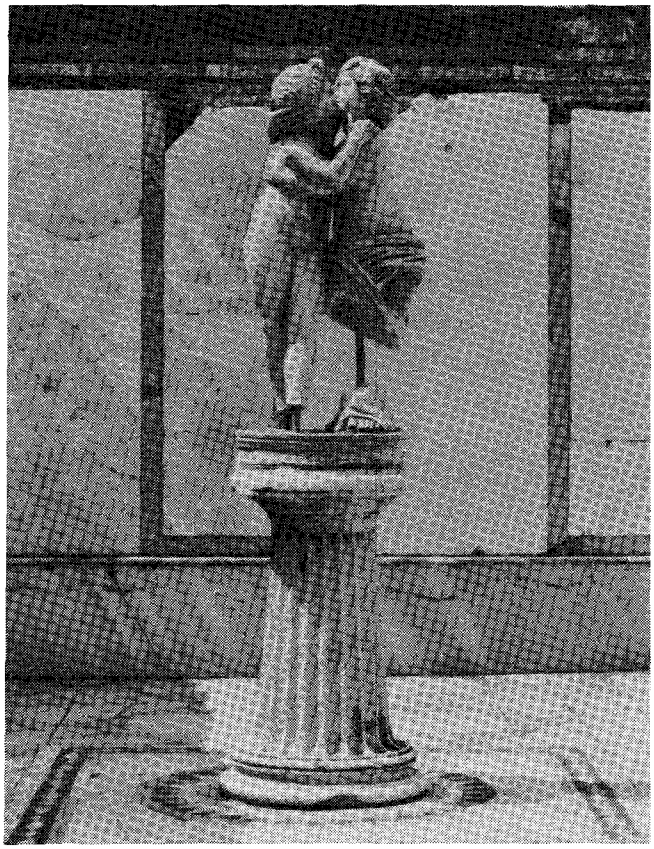
㉒ヘルクレースの神殿



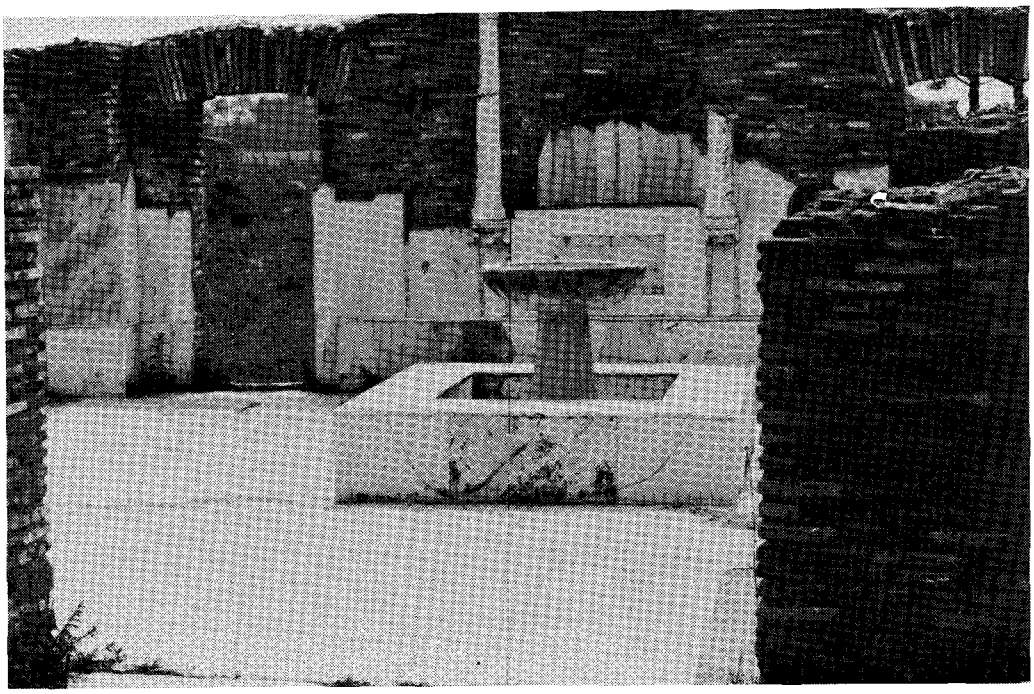
㉓　セラピス神殿



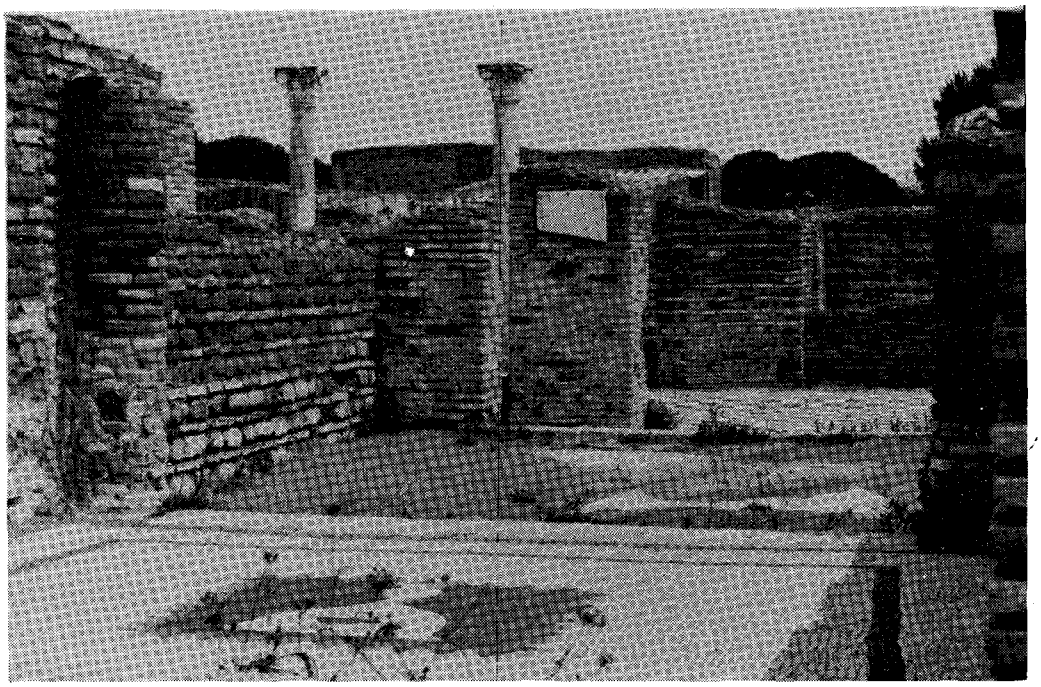
㉔ アモルとプシューケーの家



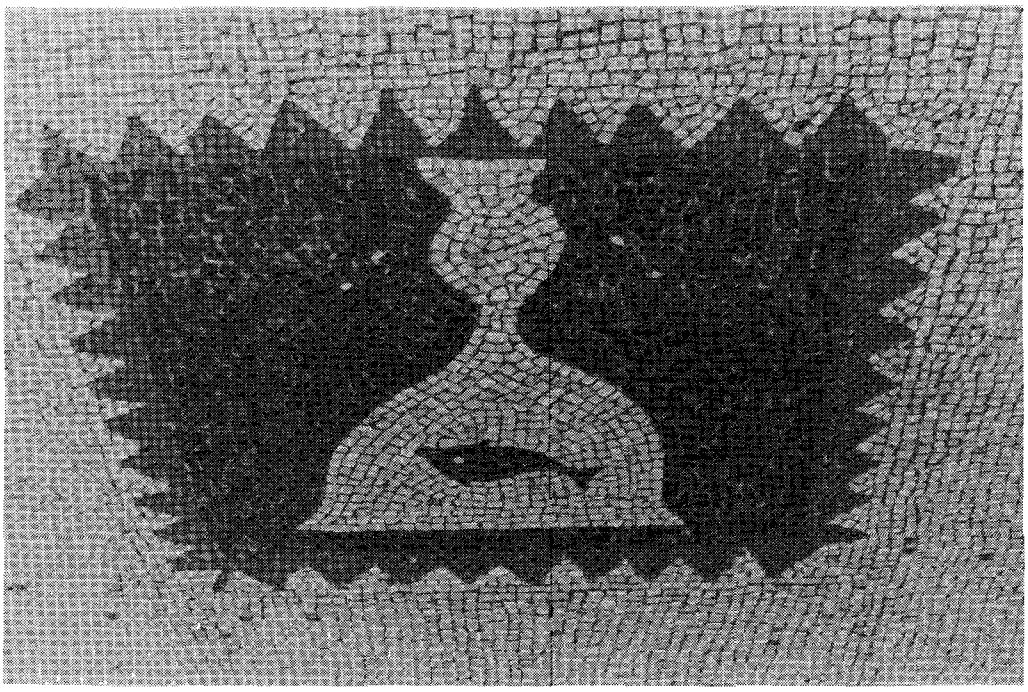
㉕ アモルとプシューケーの像



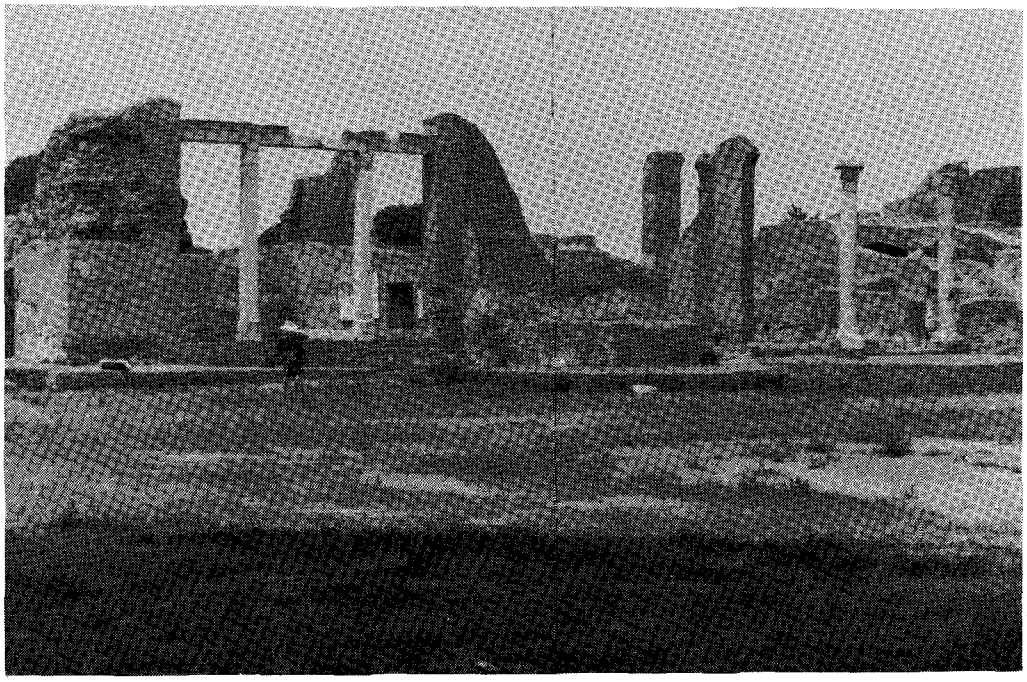
㉖ エロースの噴水



㉗ 「魚の家」

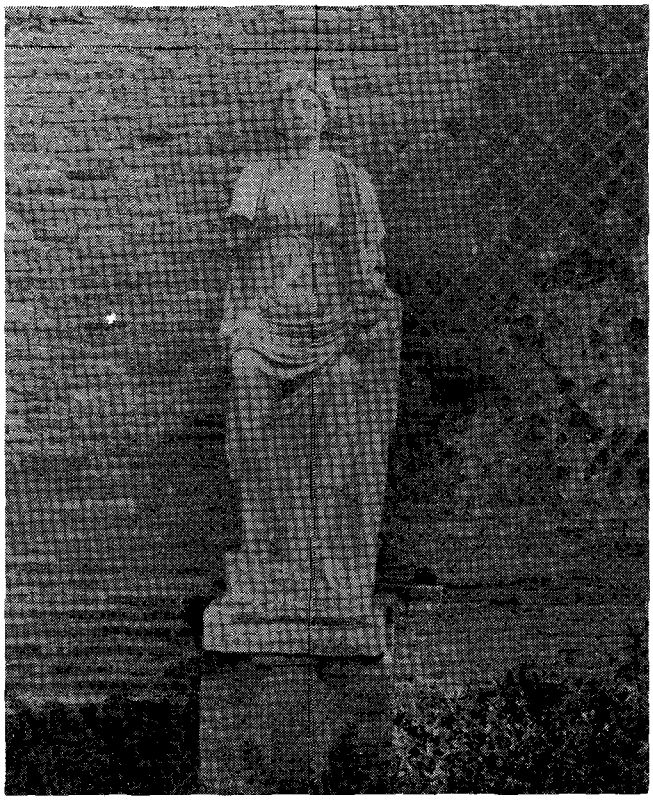


㉘ 魚の家のモザイク



㉙ フォルムの公共浴場

㉚ 「幸運のアンノーナ」の家



㉛ 「幸運のアンノーナ」女神像

〔写真解説〕

① オスティア門（現、サン・パオロ門）

ローマには古代の市壁が二つある。内側の市壁は前6世紀に、第6代の王セルウィウス・トゥリウス王が築いたといわれるが、考古学上では前4世紀初頭のものとされている。外側の市壁がこの写真に見られるもので、紀元382年アウレリアヌス帝が着手し、プロブス帝の時に完成した。現在はle mura aureliane（アウレリアヌスの防壁）とよばれている。トゥリス王の城壁は全長11キロあったが、ほとんど現存していない。一方、アウレリアヌス帝の市壁は大むね残っており、全長約19キロ、18の門と381の塔を有した（ROSSITER, 16～17）。

写真の門はオスティアに通じるので、オスティア門と称された。門の中には中世以降、巡礼者の便宜のために最寄りの教会の名がつけられたものもある。これはその一つで、ここから丁度1マイルの所にサン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ教会があるので、サン・パオロ門という名称になった。サン・パオロは著名なるキリストの使徒で、ローマで殉教し、その墓の上に教会がつくられたという。市壁の外にあるのでfuori le muraが冠されている。

現在のオスティア門は、5世紀初頭にホノリウス帝によって修築された。左側のピラミッドはアウグストゥス帝の頃の政治家ガイウス・ケスティウス（前12年没）の墓である。一辺が22メートル、高さ27メートル。内に埋葬室があって幅4メートル、奥行6メートル（GUIDA, 418）。330日でピラミッドが建造されたという碑文がある。このピラミッドは中世には「レムスの墓」と称された。レムスはローマの創設者ロムルスの双生児の弟である。

撮影点の右にオスティア行の電車の始発駅がある。昨年に行った時は往復300リラ。円高の昨今、リラが下って、100リラが約25円、従って往復が約75円という安価な運賃であった。昨年のローマでは、バスはどこまで乗っても50リラであったのには驚いた。

② オスティア街道（付図A及び付図Bの1）

電車に乗るとオスティア・アンティーカまで30分足らずで行けるが、1923年に開通する以前は24キロの道を普通に歩いて6時間、早足で4時間かかって到着したという。前半の道はテヴェレ川の渓谷をたどって行くが、途中に丘陵地がある。かつてサン・パオロ山と名づけられていたが、小さな町が建設され、考古学者ダンテ・ヴァリエーリによってアチリア（Acilia）と命名された。古代の名門アキリイ（Acilii）家にちなむ。カリグラ帝の時、このあたりよりオスティアに水道が引かれた。

丘を下ると、あとは低地を一路オスティアへと向うことになる。中世のグレゴリオポリス、ルネサンスの城を通過して、オスティア発掘現場の入口を越えると、写真の石畳道が眼前に展開する。これは正に古代の街道である。彼方にオスティアへの入口ローマ門が見える。道の左右に石棺が見えるが、市内に墓地がつくれぬというローマの法律のためである。

③ ローマ門（付図Bの2。〔以下Bを省略〕）

ローマに通じるのでローマ門（porta romana）と称されている。もとはアーチがあったが、今は写真で見られるように一部しか残っていない。前1世紀の始め、スルラが市壁や門を建設したらしい。門の奥行、約5メートル、2カ所に扉があったようだ。市壁は凝灰岩のブロックでつくられたが、共和政期におけるオスティア建築の特色である。ここから幅約10メートルの東西幹線（付図のdecumano massimo）となって、カストゥルム時代の幹線に接続する。カストゥルムの西門を越えると、道は二手に分かれ、南の方が幹線となって海洋門（porta marina）に向う。一方、北の道はテヴェレ川に向う「河口の道」（via della foce）である。ローマ門よりカストゥルムの西門まで約800メートル。

④ 「勝利のミネルウァ」像

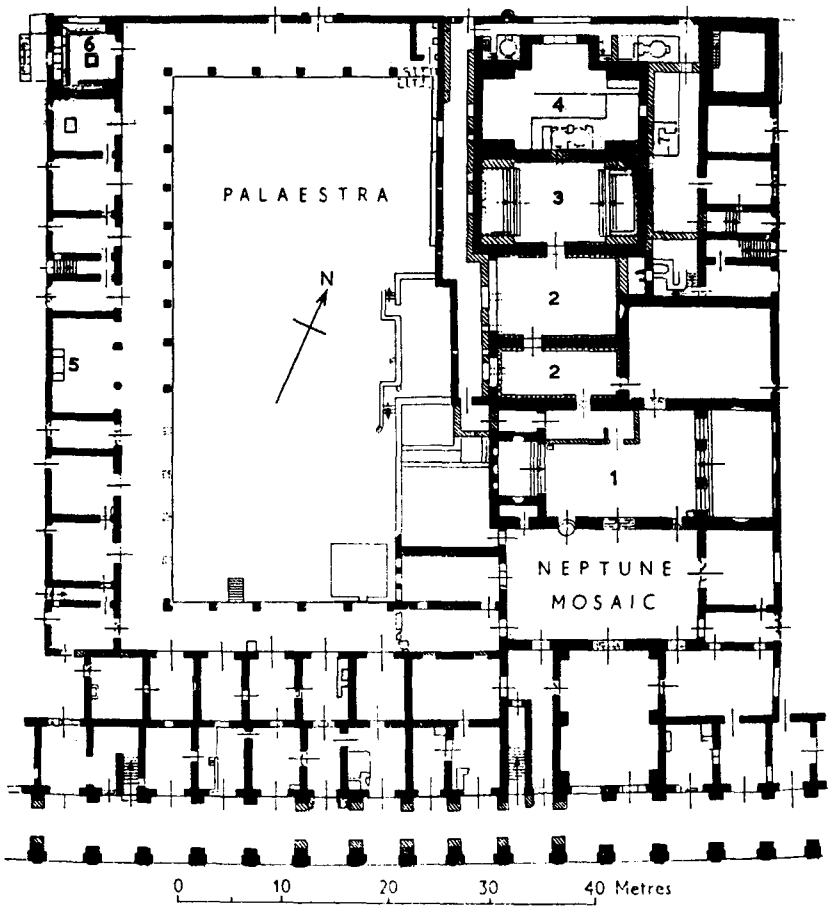
ローマ門を入った所に広場があり、ヘレニズム風のミネルウァ像が立っている。時代はドミティアヌス帝の治政期に帰せられている。それはローマのネルウァ帝のフォルム（また平和のフォルムともよばれる。「諸皇帝たちのフォルム」の一つ。ウェスパシアヌス帝が着工、ドミティアヌス帝が受けつぎ、ネルウァ帝が97年に完成）にある神殿のミネルウァ像に似ているためである。またドミティアヌス帝はミネルウァを特に尊崇していたので、フォルムに女神の神殿を建造した。女神ミネルウァはイタリアで古くから信仰されている工芸・国防の神で、ギリシアのアテーナ神と同一視される（吉村忠典「古代ローマ散歩」東京、1961年、136～137）。

オスティアのミネルウァ像は、羽を有する勝利者として表現されている。ローマ門は帝政期に拡大されたことは本文でも述べたが、このミネルウァ像は、この場で（in situ）発掘されたので（1910年）、ローマ門を飾ったらしいと推定されている。

⑤ ネプトゥーヌスの浴場、⑥ 体育場（付図6）

写真⑤はネプトゥーヌスの浴場のテラスに導く階段である。この浴場はハドリアーヌス帝が始め、アントニーヌス・ピウス帝が完成した（G. CALZA, 24）。プランは次のとおり。公共浴場については写真㉙の解説で触れるので、ここでは一般的なことは書かない。テラスより浴場の玄関のすばらしいモザイクを見下すことができる。このモザイクは早くも1888年にランチアーニによって発掘された（R. CALZA, 42）。白地に黒一色で海馬4頭を駆り立てる海神ネプトゥーヌスの雄姿。まわりに、海の精、半人半魚のトリトン、いるかなどが描かれている（写真はR. CALZA, 43. G. CALZA, 112にあり）。隣室には結婚の神ヒュメナイオスに導かれる海神の妻アムピトリーテーの裸体の姿が見られる。これらのモザイクは芸術的にも優れた作品で、古代人の自由活発な精神を感得できよう。

体育場（palaestra）は浴場付属施設で、風呂を楽しむ前にスポーツをして一汗をかく場所



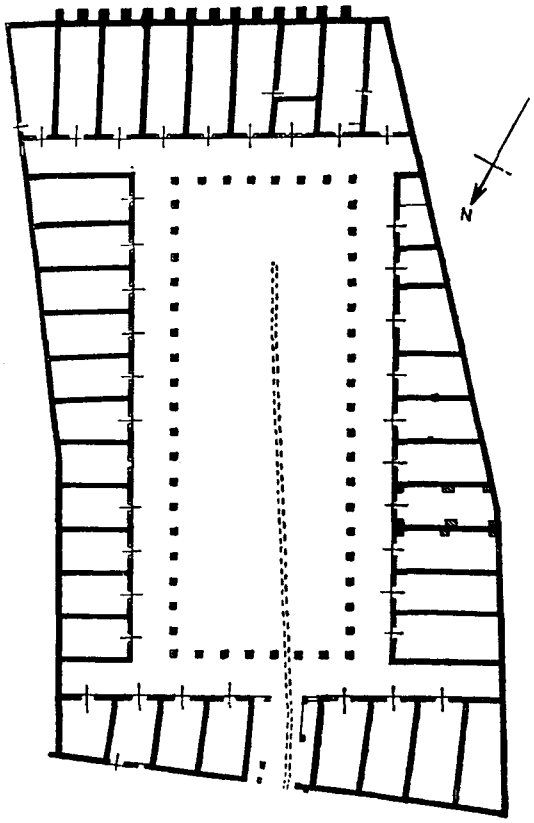
1．水浴室　2．微温室　3．温湯室　4．もとの温湯室　5．穀物神ケレースの装いをしたハドリアーヌス帝の妃サビナの像　6．便所　(MEIGGS より)

である。列柱廊つき中庭風の宏大な広場（40×60m）である。体育場の西と南に小室が並ぶが、何に使われたか分らない。ただ西側の中央の部屋には、大理石の床があり、像の台座が見られる。ここで発掘されたサビナ像が立っていたのは、おそらくこの台座においてであろうと推定されている（MEIGGS, 410)。

この浴場の裏に消防士の宿舎（付図5）が浴場と同じ頃に建設された。そこの中庭には皇帝崇拝を示す台座などがあって興味深いのであるが、ともかく「消防士たちは自己の浴場も体育場も所有していなかったので、きっと彼らの役にも立ったのにちがいない」(R. CALZA, 41)。

ここで、写真はないが、ネプトゥーヌスの浴場より東西大通りをはさんで南にある「ホルテンシウスの倉庫」(付図11) について一言しておきたい。オスティアは北に新港が完成してからもローマの穀物倉庫という位置を失なわなかった。例えば「大倉庫」(付図57) は、1世紀後半、クラウディウス港完成後つくられ、更に2世紀には収容量を2倍にするために建て替えられ、現在9000平方メートルの広さを持っている。

ホルテンシウスの倉庫もクラウディウスの新港の後に建設された。従って穀物は新港より川舟で運ばれ、すぐ北のテヴェレ川の荷あげ場よりこの倉庫へ運ばれたのであろう (R. CALZA, 60)。しかし、他の倉庫はもっとテヴェレ川に近いので、ホルテンシウスの倉庫の穀物は土地の人の用に供されたとみる説もある (MEIGGS, 280)。図から分るように多数の小室より形成されていた。3世紀にホルテンシウスなる船長が、庭の一隅に小神殿 (祭神は不明) を奉献したのでこの名がある。



ホルテンシウスの倉庫 (MEIGGS より)

⑦ キリスト教礼拝堂 (付図10)

紀元269年8月24日、「劇場の前のアーチ」(断片のみが現存) でオスティア司教聖キリアクスと処女聖アウレアの殉教があった。それは伝説と思われていたが、1910年、アーチが存在したと考えられる場所で、後陣をもつ小礼拝堂が発掘された。人骨、石棺の断片などと共に、写真に見られる石棺が出土した。その蓋に 'Hic Quiriacus dormit in pace' 「キリアクスはここに平和にねむる」という碑文が刻されている。疑問を持つ学者もいるが、聖キリアクスの石棺であることに、ほぼ間違いはないであろう (R. CALZA, 58)。そして殉教の場に小礼拝堂が設けられたのであろう。オスティアにおけるキリスト教関係の遺跡は、ミトラ教の

それと比べると非常に少い。現代のイタリアはキリスト教一色であるが、二つの宗教の勢力関係の一断面をオスティアは我々に示しているのである。

石棺の浮彫りは竪琴を奏するオルペウスで鳥や犬に取りかこまれている。オルペウスは「ホメーロス以前の最大の詩人で音楽家とされている。……オリュムポス山の北側のトラーキアで生れた。アポローンより竪琴を授けられ、あるいはみずから竪琴を発明（あるいはその弦を七本より九本に増加）し、歌と音楽の巨匠となり、彼の歌に野獣も山川草木を聞きほれたという」（高津春繁「ギリシア・ローマ神話辞典」東京、1972年8版、90）。

埋葬者がキリスト教の司教とすると、なぜオルペウスの浮彫りがあるのか。当然キリスト者ではないとする説も出て来たことであろう。あるいはキリアクスなる人は音楽を愛したのかもしれない。いろいろな想像が生れてくる遺蹟である。しかし、1162年司祭アンドレアが「ヴィルラ（グレゴリオポリスか）の外の聖キリアクス教会で」（ad ecclesiam Sancti Ciriaci extra villam）ミサをするために赴いたとの記録が残っている（R. CALZA, 58）。

⑧ 円形劇場（付図9）

アウグストゥス帝の右腕といわれたアグリッパが第1回目と第2回目のコンスル職の間、即ち前12年以前に建設したローマ特有の半円形劇場。のちセプティミウス・セウエルス帝とカラカラ帝によって大改造されたことが、劇場の北の壁にかかげられている大きな碑文の断片によって分る。

1927年に復元工事がなされて、現在の姿となっているが、2700人の観客が野外劇を楽しむことができる。筆者が訪れた時も舞台準備のため、板が張られていて遺蹟としての舞台を見ることができなかった。

なお東西大通りに面する劇場のアーケードは、古代に店として利用されたというが、今もオスティア唯一の売店があって、夏のカンカン照りの中を歩いた後、一杯の清涼水に渇をいやすことが出来るのである。

⑨ 商人組合の広場（付図8）

劇場の背後に幅50メートル、奥行83メートル（R. CALZA, 48）の大広場がある。そして二重の柱廊が三方より劇場方面に向って広場を囲んでいた。広場の中央に神殿がある（後出）。柱廊には61の組合や海外商人の事務所があった。事務所の入口にモザイクの絵や文字があって、オスティアの商業活動を示す史料となっている。前1世紀末、劇場と時を同じくしてつくられたと思われるが、主たる入口は北のテヴェレ川の方向にあった。

これらの事務所の性格と機能については諸説がある。カルツァは、ローマの物資、特に穀物供給に重きをなした商人や船主は、アウグストゥスの命によってこの地に集中させられたとする(Calza, G., 'Il Piazzale delle Corporazioni e la funzione commerciale di Ostia',

Bullettino della Commissione Archeologica Comunale della Università di Roma' 43〔1915〕178)。ロストフチェフもカルツァを支持し、組合の半官半民的要素を強調している(Rostovtzeff, M., *The Social and Economic History of Roman Empire,* Second Edition revised by P. M. Fraser, Oxford〔1971〕607～608)。一方、考古学の資料より反対の見解が出ている。それは、初期の事務所のモザイクには、後期の国際的性格が見られないことより、2世紀末のかさ上げまで、船主たちをここに集中させたという証跡はなく、国家の命令によって設けられた事務所もなかったという説である(Frank, T., 'Notes on Roman Commerce', *JRS,* 27〔1937〕74)。更に後期においても厳重な規制下にあったとは言えぬかもしれないとする推測も出て来ている(MEIGGS, 286)。

次のモザイクの解説で、後期の商人組合広場の様相を窺いたいと思う。筆者が訪れた時は、親子がのんびりと遺跡の風景をエンジョイしていた。

⑩ 商人組合広場の神殿(付図8a)

広場の中央に間口11メートル、奥行25メートルの神殿があり(GUIDA, 576)、広場の景観を引き立てている。13段の階段を上ると、柱が2本残っている神殿の前方部に達する。周辺の傘松をバックとする美しい風景であり、美しい遺跡である。

祭神については資料が何もないので分らないが、まわりが組合の事務所なので、組合の神殿であったかもしれないという説もある(MEIGGS, 329)。従って穀物に関係あるアンノーナ神をまつったとも思われる。実際アフリカにはアンノーナ神の神殿がいくつかあった。あるいは穀物神ケレースの神殿であったともされている。ケレースはローマの古い豊穣の女神であった。

神殿の周囲にはオスティアの重要市民の彫像があった。現在は台座が残っているのみであるが、procurator annonae(アンノーナ代官)のマルクス・リキニウス・プリウァトゥスやQ. カルプルニウス・モデストゥスの像があった(MEIGGS, 330)。アウグストゥス帝は、自己の治世の末期にローマ市のcuratores annonae(アンノーナ管理長官)を格上げして、praefectus annonae(アンノーナ長官)とし(AWANO, 25)、クラウディウス帝の時に長官に責任を負う代官(procurator)を任命した(浅香正、前掲書、304)。アンノーナについては写真㉚の解説でもう一度触れたい。

なお神殿建設の時代については、煉瓦がローマのドミティアヌス帝期の建造物のそれに似ているので、彼の治政時代と考えられている(R. CALZA, 53)。

⑪ 商人組合広場のモザイク

組合広場には事務所が61あったが、必ずしもすべての業種、種類は分らない。一部の事務所のモザイクが残っているので、これらから全体を窺知しているわけである。本文にしばし

ば引用した故粟野先生の論文には次のようにある。「今日、広大な船着市場の発掘によって、三方に開放せられているその市場には、船主結社60以上の代理店と、豪荘な家屋、特に各商社の入口や、床のモザイクには素晴しく豪華なものがあり、かつそれは美しい。この港湾都市の商業と関連している他の諸種の組合組織に、説き及ぶべきであるが、いま、それを述べる代りに、それらと関連した、既に出土しているこの地のラテン碑文を紹介することにする」(AWANO, 76)。以下15のモザイク碑文の訳が紹介されている。先生が参照文献を出されていないので、何を典拠とされたか不明であるが、おそらく「ラテン碑文集成」(CIL) 第4巻、補遺1を見て訳されたのであろう。手許にCILがないので参照できないのが残念であるが、筆者撮影の写真を中心に、利用できる文献を援用して、モザイク碑文の解明に当りたい。

粟野先生の訳は、柱廊南東隅より始まって北に移り、東北隅より西へ、そして南へ下る順になっている。

ここに掲げた写真は、モザイク碑文の順では3番目でNAVICULARIORUM LIGNARIORUMと明確に読みとれる。navicularius は普通は名詞で「船主」を意味し、以下頻出するが、この場合は「海に関する」という形容詞、lignarius は「大工」という名詞と思われる。従って「海の大工たちの」(事務所) と訳すべきか。(粟野先生は「船大工 (船匠) 組合」と訳されているが、適訳である) モザイク絵の方は、クラウディウス港の燈台を中にして2隻の船が見られる。地元の船大工の組合事務所であった。(しかし、マイグスは形容詞と名詞を逆にとり「材木 (を運ぶ) 船主たちの」と解している。MEIGGS, 286)。

粟野訳の1番目は「クローデウス・プリミゲニウス、クラウディウス・クレケンス5カ年間鉛板工、船綱製造工」とある。手許の写真では、絵がなくて文字のみ。次の如く読まれる。

LODIUSPRIMICINIVS
AVDIVSCRESCENSQQ
STVPPATORESRES

あいている部分はモザイクが損傷されている個所である。最下段の文字は上の2行よりも大きい。ラテン語stuppa、イタリア語stoppa は船の張板の間に詰める「まいはだ」(槙皮・槙肌——桧の内皮を砕いたもの。舟・槽などの水の漏るのを防ぐため、合せ目または接ぎ目に詰めこむもの〔広辞苑〕)。R. カルツァは stuppatores Res (tiones) と読んでいる(R. CALZA, 50)。restio は綱製造人を意味する。それで「まいはだと綱製造業者の」(事務所) と解すべきか。(C)lodius Primicinius と (Cl)audius Crescensは人名であり、QQ は q (uin) q (uenalis) 「5年間」の略号ではあるが、なお一考を要するであろう。R. カルツァは上の2行分については何も述べていない。

筆者は撮影して来なかったので残念であるが、Corpus Pelli (xonium) Ost (iensium) e Porte(nsium) hic (R. CALZA, 50) という碑文がある。ところが異同がありcorpus pellio

(num) Ost(iensium) et Porte(nsium) とも読まれている (MEIGGS, 286)。この場合hicは省略されている。結局

Corpus Pellio(num) Ost(iensium) et Porte(nsium) hic

と読むべきか。自分の目で確めることがいかに大切であるかを、両者の異同が教えている。pellioは皮革業者。複数属格はpellionumであるのになぜpellixoniumとなったのか分らぬ。「オスティアとポルトウスの皮革業者組合がここに」(あり) という訳になる。

他に文字はないが、男が右手に「とかき」(概・斗掻——枡に穀類を盛った時、枡の縁なみに平らにならす短い棒。ますかき。かいならし〔広辞苑〕) を持ち、穀物のつまった modius (枡)を左手で支えてならそうとしているモザイクがある。明らかにmensores(計量業者) の組合事務所である。mensoresについては写真⑳の解説で触れよう。(このモザイクの写真はMEIGGS, Plate XXV, cにあり)

モザイク絵のみのものでは、北側に一人の男が商船より川舟に (多分) ワインの壺を肩にして運んでいる図がある。沖仲士業者の事務所であろうか。(写真はMEIGGS, Plate XXV, aにあり)

次に国際的な商業事務所を見る。手許の写真ではNAVICULARI MISUENSES HICとあり、2隻の船のモザイクがある。「ミスアの船主たちがここに」の意。ミスアは湾をはさんでカルタゴの東ほぼ60キロの位置にある海港。*Atlante storico,* Novara (1965) 20の「アフリカ属州」の地図を見るとMissuaとある。(写真は浅香正、前掲書、307にあり)

NAVICULARIORUM DIARRY「ヒッポ・ディアリユトウスの船主たちの」。いるかのモザイク絵。その下にSIMCの文字がある。他のモザイクにMCの略号のみのものがあり、Mauretania Caesariensisかもしれない (MEIGGS, 286) とされているが、マウレタニアよりはるか東にヒッポがあるので、この略号は不明。ヒッポ・ディアリユトウスの現在名はビゼルタで、カルタゴの西北約100キロ。外港一内港一ビゼルタ湖よりなる三重の港をもつ良港である。その間は運河で連絡されている。

STAT(IO) SABRATENSIUM「サブラタの駐在所」。象のモザイク絵がある。それ故、サブラタより象や象牙が輸入されたようである (R. CALZA, 50)。サブラタはトリポリの西約90キロ。オエア (トリポリ) とレプティス・マグナと共にTripolis (3つのポリス) の一環を構成した。(写真はMEIGGS, Plate XXIII, aにあり)

NAVICULAR ET NEGOTIAN DE SUOという碑文は種々の問題を含む。地名はないが、おそらくドアにあったという推測がある(MEIGGS, 287, n. 5)。navicularii et negotiantes「船主たちと商人たち」と読むことができるが、de suoとは何か。マイグスもR.カルツァも沈黙しているが、粟野先生は「自己資本による (国庫補助にあらざるの意) 船主団(たち)と商人団(たち)」と訳されている。以下、de suoを粟野先生の解釈でもって訳す。船一隻のモザイク絵がある。(写真はR. CALZA, 51にあり)

NAVICULA KARTHAG DE SUO「自己資本によるカルタゴの船主たちの」。船1隻のモザイク絵。かつてカルタゴはローマと地中海世界の覇権をめぐって戦ったが、この頃は穀

物をローマにもたらす一港となっていた。

(NAVIC) ULARI SYLLECTI(NI)「シュレクトゥムの船主の」。モザイク絵は中央に、クラウディウス港の燈台、その左右にそれぞれ1隻の船。更に船の下にいるかが1頭ずつ画かれて、しかも真中のたこの足を口にくわえているという面白い図。船の間にMFの文字があるが、MをNに読みかえてnavi cularii feliciter「船主たちに幸運あれ」の意とされているが(MEIGGS, Plate XXIV, bの解説)、Mはどう見てもMであるので、問題は残る。Syllectumはチュニジアの港。*Atlante storico*ではSullecthumと表示されている。

NAVI NARBONENSES「ナルボの船主たちの」。右にクラウディウス港の燈台、左に帆を張った船。船尾の小さい帆は、かつてクレーンの一種と思われたことがあるそうだ(MEIGGS, Plate XXXIII, dの解説)。ナルボは古代のナルボ・マルティウス、現在の南仏ナルボンヌである。前118年、アルプス山脈を越えた最初の植民地となった。紀元309年頃、ガリア（アウグストウス帝の時5地域に分けられた）の一州ガリア・ナルボネンシスの主都となる。

以上で筆者が写したモザイク碑文を中心にした考察を終る。他に地名としてはアフリカのグムミ、クルビス、サルデーニャのカラレス（現、カリアリ)、トゥリス・リビソニス（現、ポルト・トルレス）をもつ碑文がある。シチリアの地名が見当たらないが、事務所がなかったとは結論できない。

商人組合広場には地元の組合と地中海世界の有名港との事務所が集中していたことが、以上の史料より窺われるのである。

⑫ ミトラ教礼拝堂、⑬ ミトラ神像（付図59の北）

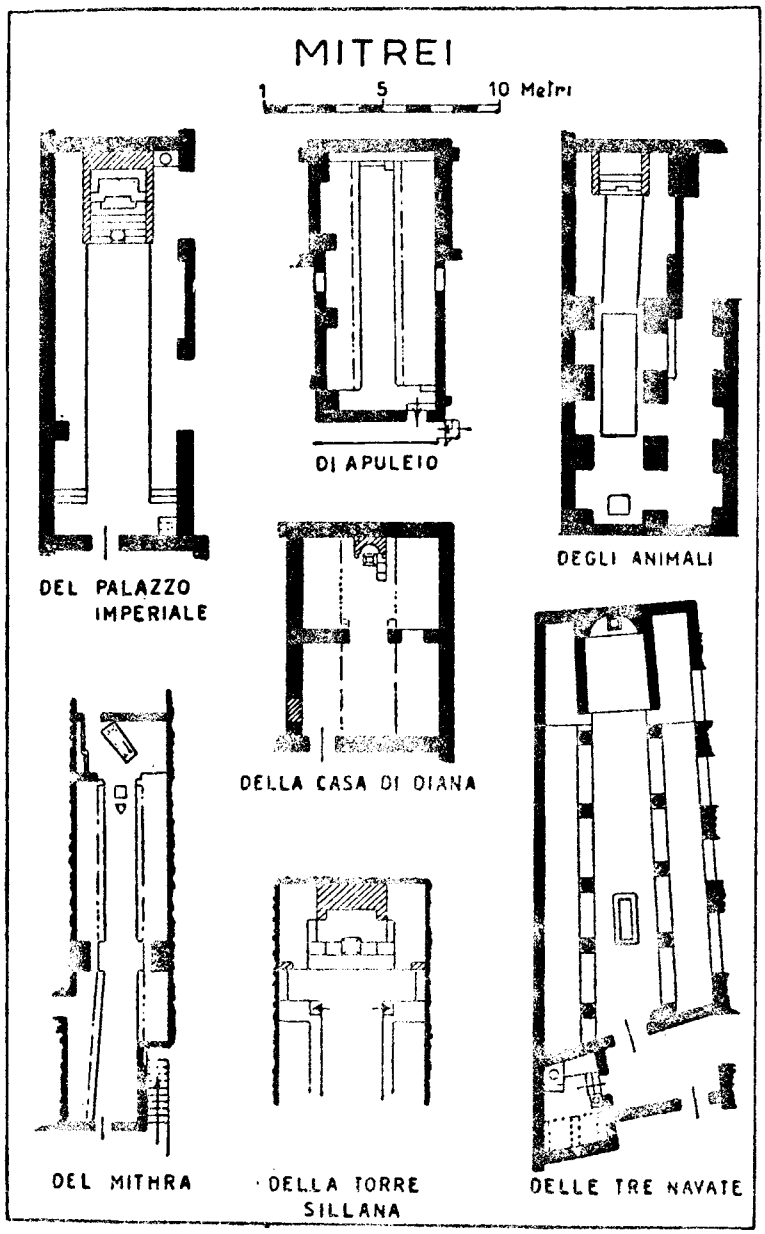
劇場の西にポンペイ風の「アプレイウスの家」(トライアーヌス時代、ただし手が加えられて帝政後期まで使用される）があり、それに隣接してミトラ教の礼拝堂（Mithraeum）がある。その場所にちなんで、「アプレイウスのミトラエウム」とよばれている。

ミトラは、サンスクリット語では「計量」「計量者」の意味で、歳月の計量者＝太陽神、また人間関係の正しい計量者＝契約・正義・友情の神として、前2000年頃アーリア人に信仰された（秀村欣二「ミトラ」平凡社版世界大百科事典、21〔1967〕325)。ペルシアのゾロアスター教では善神アフラマゾダの盟友かつ代理者としてあらわれる。その聖典「アヴェスタ」で「光の主」「真実の神」「死よりの救世主」「幸福贈与者」「勝利者」「戦士」として表現されるが、ローマ世界で軍隊、商人その他の階級の人をひきつけた理由もその辺にあるだろう（OCD, 2, p. 694)。しかしローマに入って来たのは、神秘的な儀式をともなう密儀宗教であった。ミトラの神像は一般に雄牛を殺しているが、それは死を媒介とする生の象徴であり、死と悪とに対する勝利のシンボルである。入信者は男に限られていた。

プルタルコスはミトラ教が前1世紀にローマに入って来たことを示唆している（Plut. *Vite Pomp*, 24)。しかしローマ帝国に広がったのは紀元1世紀後半以降であった。その遺址の多い地方はイタリア中部、カルタゴより西の北アフリカ、北方では東部ガリア、特にライン、ド

ナウ両河の国境地方、ブリタニアではハドリアーヌス帝の長城まで延びている。国際的なセンターや港、即ちローマ、オスティア、プテオリ、アクイレイア（アドリア海に面する北イタリアの大都市であった)、ロンディニウム（ロンドン）でさかんに信仰された（OCD,2,p.695)。兵士と商人が流布の主役であった。

さてオスティアでは現在18のミトラエウムが判明している（R. CALZA, 100)。キリスト教



G. CALZAより

関係の遺跡が、写真⑦の礼拝堂、写真㉗の「魚の家」、付図26のキリスト教聖堂（1940年発掘。以前にあった公共浴場の温湯室を改造したもの。4世紀中頃または終末)、付図42のミトラの浴場の一隅にあるキリスト教礼拝堂（5世紀前半）の四個所だけであるのと対照的である。

図の中のDI APULEIOとあるのが、「アプレイウスのミトラエウム」であるが、一般にミトラエウムは細長い小室よりなる。それは光よりさえぎられた洞窟を象徴する。ミトラ神は洞窟で生れたからである。

写真のミトラエウムの入口には、いけにえの血を受ける穴が今なお見られる(GUIDA, 576)。内部は両側にpodium（壁の下部を突出した腰掛け）があり、廊下には白地に黒で七つの円のモザイクがあって七つの惑星を象徴している。またポディウムの端の狭い出っ張りには黄道帯12宮のモザイクがある（MEIGGS, 371)。正面には大理石のミトラ像。雄牛にまたがり、短刀で刺して後をふり返るという通常の図像で表現されている。なお、見学者は内部へ入ることが出来ず、正面の窓より中を見ることになっている。

⑭ カストゥルムの東門（付図58a）

1914年カストゥルムの城壁と門が発掘された（R. CALZA, 228)。城壁は大きな凝灰岩のブロックが積まれたもので、壁の厚さは1.65メートル、高さは最高約6.6メートルの個所が残っている（浅香正、前掲書, 301)。東門の凝灰岩ブロックには火災の跡が認められるが、これは208年頃大火がオスティアの城壁と門を襲ったというリウィウスの記述を裏づけている（R. CALZA, 207)。

写真で見られるように、ローマ門よりここまで来た東西幹線が急に狭まって、しかも下降している。これはオリジナルの道よりかさ上げされていた後期の道路が、ここに至って原道に復元されていることを示している。

⑮ カピトリウム（付図50）

カストゥルムの東門より約100メートル行くと宏大な広場（9000平方メートル）に出る。かつて東西幹線と南北幹線が交叉していたが、フォルムや神殿の建築によってその後をとどめていない。フォルムは元来市場や商店のある所であるが、ローマのフォルム・ローマーヌムに見られる如く、宗教と政治のための公共広場となった。オスティアの場合は、紀元1世紀前半に、フォルムと南側のローマとアウグストウスとの神殿がつくられ、2世紀、ハドリアーヌス帝の時代に北側にカピトリウムが構築された。両神殿はあい対して東西幹線に向っている。カピトリウムはローマのそれに模してイタリア各地につくられ、最高神ユーピテル、その妃ユーノー、加えてミネルウァの三柱が祭祀された。

オスティアのカピトリウムは、ここで最も信仰されたという火の神ウルカーヌスの神殿と信じられていた。ウルカーヌスの神殿は、まだ所在位置がはっきりとしない(G. CALZA,

15)。また三神をまつるカピトリウムであるという確たる証拠もないが、内陣の中に大きな壁龕が三つあることと二次史料とによりほぼ間違いはないとされている（MEIGGS, 380)。

共和政期の二神殿をこわして、カピトリウムが建設されたことが、最近の発掘によって明らかとなった。幅35メートル、高さ17メートルの大規模な建て物である。内側外側ともに大理石におおわれていたが、中世・近代を通じてはぎ取られた。1427年フィレンツェのコジモ・メディチが訪れた時、心なき人によりカピトリウムが破壊されつつあったという史料もある（R. CALZA, 196)。

⑯ ローマとアウグストゥスの神殿と ⑰ 神像（付図48）

紀元1世紀前半カストゥルムの防壁と南門をこわして、神殿が建設され、フォルムが整備された。この神殿はローマとアウグストゥス帝に献じられたことが同時代の碑文によって分る（G. CALZA, 30)。またG. カルツァは多分ティベリウス帝が神殿を寄進したとする。一方R. カルツァは建築と彫刻の様式によって20年～30年頃とし、ティベリウスの貨幣がここで発掘されたので、年代決定は立証されたとしている（R. CALZA, 186～7)。6本の柱（縞状石灰岩の基礎の上に一部残っているのみ）のある前方部は13.10×7.60メートル、内陣の奥行は11メートルある（GUIDA, 579)。

印象的なのは女神ローマの彫像である。アマゾーンの服装をして、左足を帝国世界支配の象徴である球に置く女神像は、顔の部分が一部ないだけに悽愴美を感じさせるのである。またアウグストゥスへの皇帝崇拝の場であったのも興味を引く。像も女神像に並んで存在していたであろう。

もとは全部大理石におおわれていたというが、現状は写真に見られるとおりである。神殿正面の装飾などが発掘されて、左側の壁（写真では見えない）に展示されている。うち勝利女神像は、第二次大戦中に顔が持ち去られたが、復原されて全体像を見ることができる。この神殿へは左右の階段より出入りすることになっているので、かつて神殿の前に演壇があって集会場として利用されたのであろうという仮説は面白い（R. CALZA, 186)。

⑱ 魚屋と ⑲ モザイク（付図23）

カストゥルムの西門を出ると道が二手に分かれる。日本語では追分または分岐点と言うべきであるが、ローマではCompitumといって追分を守るヘルクレース、シルワーヌス、メルクリウスの三神が祀られた。オスティアにも小祠があって、そこから三神の像を刻した矩形の標石が出土している（R. CALZA, 94)。

コンピトゥムの前に市場（Macellum）があり、入口に魚屋が二軒店を並べていた。店が出来たのは2世紀末である。魚が並べられた販売台があり、そのうしろに水槽がある。生きている魚が泳いでいたであろう。手前の店（写真では左側）は、より広いが設備はつつましか

ったようである。店の奥に魚のモザイクがあり、INBIDE CALCO TE「やっかみ屋め、お前をつぶすぞ」との銘がみられる。おそらく、商売がたきへの冗談めいたあてつけであろう。

さて、魚屋のかたわらより市場に入ると、中庭があり、真中に噴水があった。西側の大きな台は販売台と思われる。縞状石灰岩の柱は紀元1世紀初頭のものであるが、市場は2世紀末に修築された。これは魚屋の店と時を同じくする。市場の柱に次の銘がある。Lege et intellige mutu loqui ad Macellu「読んで知れ、市場でひとはペチャクチャしゃべるということを」(R. CALZA, 97)。市場の商人か、あるいは顧客がなしたのか分らないが、時代を問わず、市場はにぎやかであった。

⑳ 穀物計量業者のホールと ㉑ モザイク (付図40)

テヴェレ川の近くに「穀物計量業者たちのホール」(Aula dei Mensores) がある。写真のモザイクが何よりの証明であるが、業者たちがパトロンのラウレンティウスなる人に捧げた彫像の台の銘よりも、彼らに関連した建て物であることが分る (G. CALZA, 35)。これを倉庫と見る人もあるが、やはり穀物計量業者たちの本部とみたい。単に計量だけが仕事ではなく、acceptoresは下された荷をチェックし、adiutoresは倉庫へ穀物が出入りする時に量を記録し、nauticarii は川舟で穀物がローマへ運搬される時に管理したようである(MEIGGS, 282)。彼らは正に複雑で完全なアンノーナ組織で活躍する「軍隊」であった (R. CALZA, 154)。

モザイクを見ると、穀物を運搬している人(sacomarius)、子供は袋の数をかぞえる計算者(calculator)、左手に「とかき」をあげているのが計量者 (mensor)と見てよいであろう。計量者の右の容器がmodius (イタリア語moggio) である。商人組合広場のモザイクに関連して、単に「枡」と訳しておいたが、実は国家によって定められた、木または金属製の円筒形の角型容器で、1モディウスは8.733リットルときめられていた (*Dizionario Enciclopedico Italiano,* 7 (1970), 847 'modio' の項)。中世イタリアでは地方によって1モッジォの量が異なるので注意を要する。なおホールは2世紀に完成、235年頃改築。モザイクも改築の時に出来た。

㉒ ヘルクレースの神殿 (付図43)

オスティアでは共和政期の建造物は、後世に建て替えられて殆んど見ることができないが、祭祀の場である神殿のみは古いものが残っている。

カストゥルムの西門より右へ少し行くと、共和政期の3神殿に達する。他の2神殿の祭神は不明であるが、中央の最大の神殿 (31×16メートル) は「不敗のヘルクレース」(Hercules Invictus) に捧げられた。その銘のある祭壇は4世紀にアンノーナ長官ホスティリウス・アンティパテルが奉献した (ROSSITER, 320)。神殿はスルラの時代にさかのぼるであろうから、少くとも400年間信仰が続いたことになる。4世紀は伝統宗教よりキリスト教に移行する重大な世紀であった。

ヘルクレースはギリシア神話最大の英雄ヘーラクレースがローマに将来されてよばれた名である。彼は超人的な力を与えられ、12の試練を乗り越えたことで有名。写真で見られる巨大な像は頭部がないので残念だが、内に秘められた力を感じさせる。像の奉献者は前1世紀後半のオスティアにおける名士C. カルティリウス・ポプリコラであった。

㉓ セラピス神殿（付図41）

127年1月24日、カルティリウスという人によってセラピスの神殿が奉献された（R. CALZA, 159）。その日はハドリアーヌス帝の誕生日でもあった。「エジプトのアレクサンドリアには最も壮麗なセラピス神殿がある。エジプトのOsis-Hapiの混成神で……プトレマイオス1世時代創めて新興政権の国家の祭祀神とされたというのが通説になっていた。セラピスは航海、商業、船主、一般人民の守護神として尊崇を集めていた。従って、アレクサンドリアの商人の行く先々の港には、セラピス神殿がある」（AWANO, 17）。

オスティアに運ばれる穀物の大部分は属州エジプトより来た。エジプトの人々の居住地は「河口の道」付近にあったようであり、そのため彼らの居住地の近くにセラピスの神殿が建てられたようである（R. CALZA, ibid.）。比較的小規模であることは写真からも窺えよう。写真に入らなかったが、手前に聖牛アピスの白黒のモザイクがある。そこが入口で、続く中庭にもナイル河の風景をあらわす河馬や鰐などのモザイクがあったが、ほとんど残っていない。神殿に接続して神官や管理人が住んだと思われる区画があったが、のち（4世紀？）区切られて邸宅となった。セラピス信仰の凋落を物語っている。

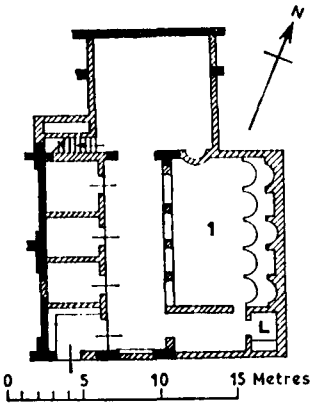
㉔ アモルとプシューケーの家（付図44）

帝政後期におけるオスティアの住宅は、高層アパートより邸宅に移っていることが判明したのは1938年に始まる発掘の成果による。小さいが、非常に美しいアモルとプシューケーの家も後期（4世紀）の一戸建住宅の一つである。

一階は廊下をはさんで、右に庭と噴水、左に小部屋、一番奥に広間がある。その広間の幾何学模様の多色大理石の床と壁が見る者にため息をつかせる。オスティアで最も美しい床であろう。

写真は小部屋の方より噴水を望んだもの。小庭園の奥に五つの壁龕が小さな柱によって分けられている。壁龕の下部より大理石の小階段が庭に下っている。

この家の名は、ここで発見されたアモルとプシューケーの小像によって名づけられた。



1．庭と噴水　L．便所
（MEIGGSより）

㉕ アモルとプシューケーの像

ギリシアの愛の神エロースは、ローマではクーピード（キュピッド）またはアモルとよばれた。

プシューケーとアモルの有名な恋物語は、2世紀の作家アープーレイウスの「黄金のろば」にある。彼女は王の三人娘の末っ子で、絶世の美女であった。愛の神アモルがプシューケーを愛し、山奥の宮殿に導き夜だけ訪れたが、姿を見せなかった。二人の姉が彼女の幸福をねたみ、夜、燈火で夫の顔を見させるが、それに気づいたアモルは去ってしまう。プシューケーは夫を求めてさまよい、アモルの母ウェヌス（ヴィーナス）の所へ行くが、数々の難題でいじめられ、最後に冥界の女王よりもらって来た箱をあけて深い眠りに落ち入る。アモルは彼女を探しに出かけて見出し自分の矢でつついて眠りをさまし、オリュンポス山に上って神々の許可を受けて彼女と暮らす。

ところで、アープーレイウスの物語のはるか以前、ヘレニズム時代に少年アモルと少女プシューケーの愛の姿を表現した小型美術が現われている。

この家で発見された像はヘレニズム時代の模刻である。像は博物館（付図52）に展示されているということであるが筆者が訪れた時は休館中であったので、この写真はコピーではなく博物館にあるオリジナルが特に移されていたものとも思われる。

㉖ エロースの噴水（付図20）

これまた帝政後期の美しい記念物で、4世紀のブルジョア趣味のあふれた噴水である。位置からみて、個人の所有物ではなく、町の一隅の憩いの場であったようである。

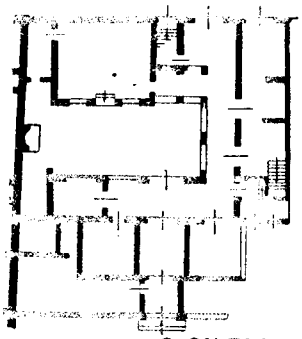
壁には三つの壁龕があり、中央にはおそらくキュピッド（エロース）の母ヴィーナスの像があったのであろう。他の二つには弓を引く可愛いいキュピッド像があったとみえ、こちらの方は発見されて博物館にある。

噴水のまわりはすべて真っ白の大理石が敷きつめられている。中央の水盤は、第二次大戦中、外国兵士に持ち去られ、今あるものはサイズを縮少して復元したものである（R. CALZA, 85)。

㉗「魚の家」と㉘モザイク（付図19）

オスティアには数少いキリスト教関係の遺跡の一つである。G. カルツァは家がcristiana？といささかのためらいを示したのち、モザイクの解説で chiaro simbolo del cristiano a cui dovette appartenere l'abitazione（明確なキリスト教のシンボルで、住居もそれに属するのに違いなかった）と言う（G. CALZA, 50)。

モザイクは北の入口（図では手前）にあり、大きなワイングラスの中に魚が泳いでいる。全体


G. CALZAより

は濃緑色であるが、グラスの下方に紫色のモザイクでもう二匹の魚が左右対称に配置されている。

魚はギリシア語では*ἰχθύς*であるが、これは*Ἰησοῦς Χριστὸς Θεοῦ υἱὸς Σωτήρ*（神の子にして救世主のイエス・キリスト）の頭文字を全部合わせた語に等しいので、キリスト教のシンボルであった。

R. カルツァは、帝政後期の15の家の中で、キリスト教に関する唯一のものであり、オスティア司教の住居かつ集会の場であったろうかという仮説を提出している（R. CALZA, 83)。

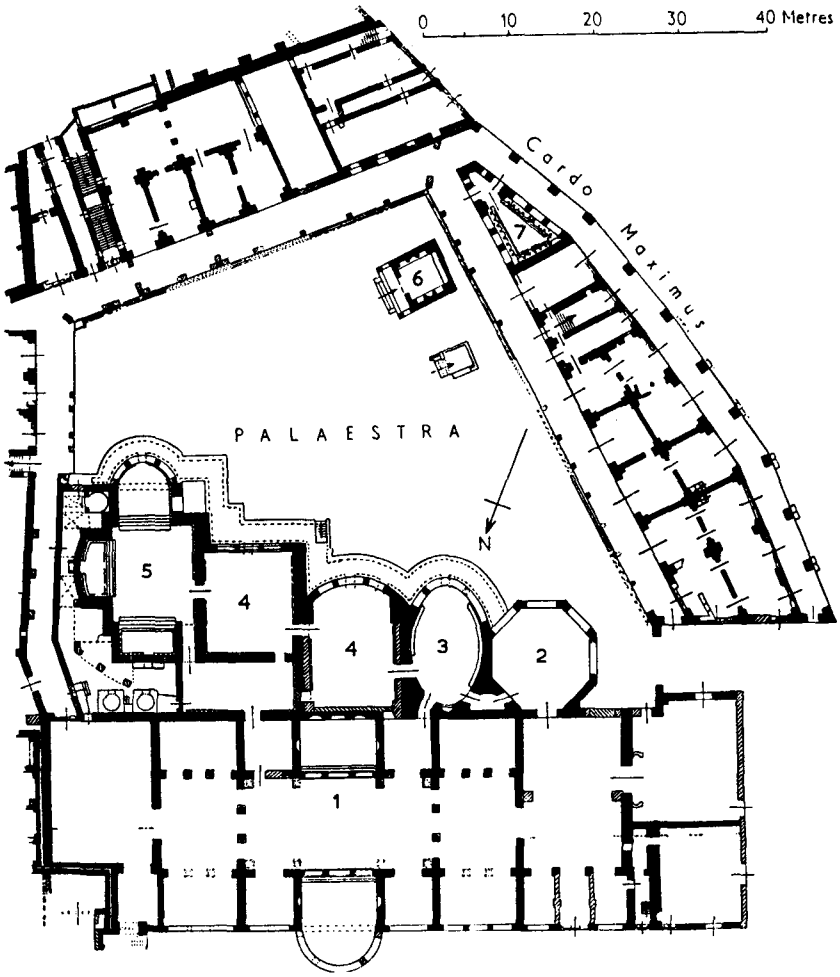
この家は3世紀に建てられたが、4世紀初めに改造された。北方に入口が追加され、モザイク画が出来たのもその時である。写真は北側より魚のモザイクを前方に入れて南を望んだものだが、南側の広間と中庭を区切る大理石の見事な柱が見える。中庭に大きな半円形の堀池が、以前にあった噴水におおいかぶさるように作られたが、これも洗礼用のためであろうとR. カルツァは述べている。

しかし、魚は異教的な装飾と見られぬこともないとする考え（MEIGGS, 400, n. 5）やキリスト教との関連を否定する説（Schaal, H., *Ostia, der Welthafen Roms,* Bremen〔1957〕, 153）もある。

㉙ フォルムの公共浴場（付図21）

ローマ帝国の人々にとっては、公共浴場は一大レクリエーションの場であった。風呂に入る前に体育場（palaestra）でスポーツを楽しみ、「一汗かくと発汗室（sudatorium）の蒸気でできるだけ汗を出したのち、温湯室（caldarium）でその汗を流し落す。つぎに微温室（tepidarium）で身体を徐々にさまして水浴室（frigidarium）の冷水の中にとびこむ」（吉村忠典、前掲書、194)。入浴料はun quadrante即ちローマにおける最も低廉な青銅貨幣一つでよかったというから、我々の感覚ではさしずめ10円ぐらいであろうか。ただし女性の入浴料は男の2倍であった。また女性専用の部屋があったか、あるいは特定時間（ある資料では11時より12時までの間）に限って婦人は入浴した（R. CALZA, 89)。このフォルムの浴場の温湯室の三つの浴槽から骨製ヘアピンが大量に発掘されているのも、女性入湯の事実を立証している。

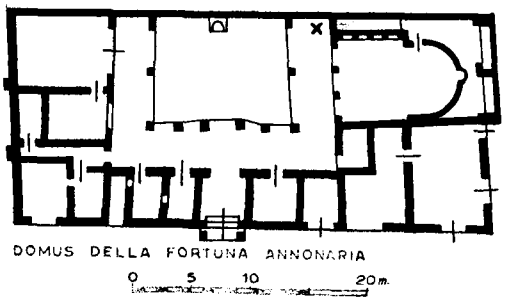
フォルムの浴場は2世紀に建造され、4世紀に改造された（G. CALZA, 51)。オスティアにおける帝政後期の建築の特色は、従来の直線偏重に対して、カーブが大胆に取り入れられたことであるが、体育場より発汗室、微温湯室を望むこの写真にも曲線の導入が窺がえる。改造の際にモザイクや雲母大理石の柱で化粧された。体育場の柱廊には雲母大理石の柱が復元されて立っている。八角形の広間（写真では大きな窓が見える）は多分、日光浴室（Heliocaminus）であろう（MEIGGS, 414)。北側の広大な冷水浴室の壁龕には、健康の神アイスクラーピウスとヒュギエイアの像が今なお存在している。



1．冷水浴室　2．日光浴室？　3．発汗室　4．微温室　5．温湯室
6．神殿（祭神は不明）　7．便所　（MEIGGSより）

㉚「幸運のアンノーナの家」、㉛　女神像

最後に紹介するのは、アンノーナに関連する高官の邸宅と思われる家である。1938～40年の発掘で明らかとなった遺跡で、3世紀に建造、4～5世紀に改造されたようである（R. CALZA, 67～68）。もっとも、アントニーヌス・ピウス時代（2世紀）につくられ、4世紀に改造されたとする説も



G. CALZAより

ある（MEIGGS, Plate XIV, aの解説）。

家の見取図は下部が北であるから、左の部分、即ち東方に最初の建築時の部分が残っている。中央の部屋にはhypocaustum（地中暖炉――暖気管を床下、壁内等に通し、浴槽、室房を暖む〔富山房版大英和辞典 'hypocaust'の項〕）の設備があった。中庭は縞状石灰岩の柱でかこまれていた。写真は右側（西方）の広間より庭を望んだもの。中庭よりこの広間へ入るには酒落たアーチ、細い大理石の柱、アフリカ産大理石の敷居を通過した。

筆者の撮影点の右側には細長い噴水があり、小壁龕が四つ、それに接している。また撮影点の後ろには後陣風のカーブがある。

中庭の西南端（見取図の×印）には写真㉛の女神像が置かれている。女神は左手にcornucopia（コルヌ＝コピアイ、豊穣の角〔horn of plenty〕――Zeusに乳を与えたヤギ Amalthaeaの角とも、またニンフAmalthaeaのヤギの角とも、あるいは河神Achelousが雄牛の形に身を変えてHerculesと戦って折られた角ともいわれる。その角からは望むままに食べ物・飲物・果物・花などがあふれ出たといわれ、物の豊かさを象徴する〔小学館ランダムハウス英和大辞典〕）と舵とを持っているが、前者はフォルトゥーナ（幸運）の女神、後者はアンノーナの女神の象徴（MEIGGS, Plate XVIII, cにあるアントニーヌス・ピウス帝期の貨幣の写真には、アンノーナ女神像があり、右手にパピルス？、左手に舵を持つ）。

これ迄筆者は「アンノーナ」「年貢穀物」などといろいろ書いてきたが、Annonaは 'the Roman corn supply'（OCD, 2, p. 66）を意味する。しかし、その語原にAnnus(年)の意があるので、粟野先生は「年貢穀物」と訳された。「どの（アンノーナの）邦語訳にもR.Oehler, Annona, PWK I 1894, 2316が指摘している語原Annus『年』が入っていない。しかし、用法によって皆正しいのである。そこで…『アンノーナ』に『年貢穀物』または『年貢穀類』の試訳を用いることにした。……そして『年貢穀物（アンノーナ）』という場合は殆ど『小麦』のことと同じだと考えて頂いてよい。元来『アンノーナ』は『年間収獲物』であり、『自然生産物の年間収益』であるところから、のちには、語意を拡大して『無料配給穀物』『配給量』『軍用必需品』にまでなった」（AWANO, 7～8）。以上でアンノーナの意味が理解できよう。

再び女神像に戻るが、フォルトゥーナとアンノーナが結びつけられているので「幸運のアンノーナ」と訳してみた。アンノーナ女神像がここで（in situ）出土したことや、邸宅の豪華なことから、アンノーナ長官の住居であったかもしれないと言われている。アンノーナ長官は、後期にはオスティアに居住した（R. CALZA, 69）。

なお、しばしば参照させてもらった粟野先生の論文は、エジプトがローマの属州となって以来、エジプト人民がアンノーナ供出によっていかに苦しんだか、それをローマより発信されたギリシア・パピルス文書の書簡7通の訳出に始まって、アレクサンドリア、プテオリ、オスティアの役割り、地誌、史料の問題に至るまで論じられた研究である。就中アレクサンドリアの燈台の測定値の考証（本稿註27）は世界の学界をも納得させる合理的なものである。今、偉大なる先進に対する敬慕の念でもって、小論を終りたいと思う。

註

(1) 浅香正「ローマ文明の跡を訪ねて」東京、(1975)、293～309

(2) 同書、298

(3) 田中秀央・木村満三訳「アェネーイェ」東京、(1949)、8、原典は、Verg. *Aen.* Ⅶ、25～36

(4) Carcopino, J., *Virgile et les origines d'Ostie,* Paris (1919).
Tilly, B., 'The Topography of *Aeneid* Ⅸ with reference to the way taken by Nisus and Euryalus', *Rivista dell'Istituto di Archeologia della Università di Roma,* 8(1958), 164～172.
MEIGGS, 483～487. ('Virgil and Ostia').

(5) 'Ostia munita est:idem loca navibus celsis
munda facit nautisque mari quaesentibus vitam'
Warmington, E. H., *Remains of Old Latin, I, Ennnius and Caecilius,* (Loeb Classical Library), London, (1956), 52. (Enn. *Ann,* i fr. 146～7)

(6) Dion. Hal. iii. 44. 4.

(7) G. CALZA, 7.

(8) OCD, 2,'Colonization, Roman', p. 265.

(9) G. CALZA, 7. Carcopino, *op.cit.* 17～35.

(10) MEIGGS, 20—21. なおMeiggsはOCDの第1版、第2版共にOstiaの項目を執筆しているが、第1版では'its traditional colonization by Ancus Marcius has not yet been confirmed by excavation'とあるだけである(OCD, 1, p. 629)。しかし第2版では 'But an earlier settlement associated with salt workings would have been outside the Roman Ostia now largely excavated, and the area near the medieval salt-beds has not yet been fully excavated'(OCD, 2, p, 760) とある。

(11) MEIGGS, 25.

(12) DAL MASO, 69. 他に前217年オスティアよりスペインに向って援軍が出発。前211年サルデーニャより穀物到着(応援食糧か)などの動きがある。

(13) この頃、ティベリウス・グラックスが穀倉エルトリアを通過した時、「人気のない土地で耕したり家畜を飼ったりしているのは外国から連れて来られた奴隷であるのを見」て土地改革を決意した。Plut. *Gracchi,* 8. 9. 河野與一訳「プルターク英雄伝」10, 東京 (1957) 78～81.

(14) Livius, xxxiii. 42. 8.

(15) Livius, xxxvi. 2. 12.

(16) プテオリについてはAWANO, 63～69参照。使徒パウロがアレクサンドリアの船に便乗してイタリアに着いたのはこのプテオリであった。前1世紀より繁栄し、特にエジプトがローマ属領となってからは、年貢穀物(アンノーナ)の陸揚港となった。最盛時の人口15万人。

(17) マイグスの推論である。Cf. MEIGGS, 30.

(18) Livius, *Ep.* 79;Appian, *BC* i. 67. 5.

(19) Appian, *BC* i. 88. 7.

(20) MEIGGS, 35. n. 2.

(21) G. CALZA, 9.

(22) Ibid.

(23) 単位は記されていない。キャリイは3000ブッシェルとする。Cf. Cary, E., *The Roman Antiquities of Dionysius of Halicarnassus,* Ⅱ, (Loeb Classical Library), London (1962), 179. 一方マイグスは3000 amphorae＝3000 talents＝9000 modi＝c. 78 tonsとしている。Cf. MEIGGS, 51.

(24) Dion. Hal. iii. 44.

(25) Strabo, 231—232. AWANO, 73.

(26) Sen. *De brev. vit,* 18. 5.

(27) アレクサンドリアの燈台については、AWANO, 36～42. 粟野先生はイスラムの学者イブン・アル・シアイイ（1132～1207）の記録をもとに考証され、燈台の高さは142.6メートルあったと結論づけられた。粟野先生による復原図は38頁、Herman Thierschによる復原図（1907年）は37頁にある。なおAWANO論文図版1も参照。Dal Masoの書にあるクラウディウス港燈台復原図は、アレクサンドリア港のそれに模して画かれている。DAL MASO, 106,

(28) Suet. *Claud.* 20. AWANO, 72. また粟野先生はクラウディウスが大型船舶建造保護奨励の法令（Gaius, *Digest.* l, 32c. Ulpian. 3, 6）を42年頃に出しているのは、新港築造と関係が深いと見ていられる。AWANO, 49～50.

(29) DAL MASO, 105.

(30) G. CALZA. 10.

(31) 図版についてはAWANO, Plate VIII, またMEIGGS, Plate XVIIIにもあり、解説が付されている。

(32) MEIGGS, 161.

(33) DAL MASO, 103～104.

(34) Tac. *Ann.* XV. 18. 3.

(35) Lanciani, R., 'Ricerche topografiche sulla città di Porto', *Annali dell' Istituto di Corrispondenza Archeologica,* 40 (1868), 163.

(37) DAL MASO, 108.

(38) 柱廊のうち注目されるのはPorticus Placidiana（プラキディアの柱廊）でトライアーヌスの運河の北岸、最も海寄りにあった。長さは200メートルあったらしい（MEIGGS, 169）。よく知られているように、ガルラ・プラキディアはウァレンティアヌス3世の母であり、ラヴェンナにある彼女の廟はそのモザイクと共に著名である。柱廊は425年頃の建造で、ポルトゥス最後の建て物であろう。

(39) 浅香正、前掲書、307.

(40) OCD, 2, p. 761. なおOCD第1版の公共浴場の数は6とされている。発掘の進展が窺われて興味深い。

(41) Ibid.

(42) G. CALZA, 12.

(43) 314年アルル公会議にポルトゥス司教出席。MEIGGS, 88.

(44) ROSSITER, 324.

(45) Ibid., 314.

(46) MEIGGS, 106.

(47) OCD, 1. p. 629. しかし万国博は結局第2次大戦のために開かれなかった。

(48) ROSSITER, 314.

追記　本稿に掲載した写真は、すべて筆者撮影のものであることを付記する。
なお、本研究は昭和51年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。